

# 「神子柴論争」の行方

栗島義明

# 「神子柴論争」の行方

栗島義明<sup>1</sup>

## 要 旨

先史考古学には未だに解決されていない幾つかの論争とも言うべき研究課題がある。その中でも神子柴遺跡の評価を巡る議論は最も良く知られたものの一つで、出土した石器群の評価に始まり、出土状態や分布、編年的な位置とその系統など、多角的な議論が展開されている。神子柴遺跡をめぐるそうした議論は遺跡調査から60余年が経った現在でも決着を見ておらず、石器の個別評価からその分布や遺構としての理解などといった基礎的問題に関してさえも、研究者間での統一的理解が得られていないのが現状とも言える。

神子柴遺跡と出土石器群を巡る見解の齟齬の一義的要因については長らく正式報告書が未完であったことに求められてきたが、2008年に大部の正式報告書『神子柴遺跡』が刊行された後も状況は何ら変わることなく、寧ろ報告書に依拠した実証的研究が少なくなってきた印象さえ抱かざるを得ない。そこで本論では従来の神子柴遺跡を巡る論争とも言える議論を見直す為にも報告書という研究の原点に立ち返り、改めて神子柴遺跡の石器群・石器集中の評価をおこなうことで今後の研究方向の修正を試みた。その結果、神子柴遺跡の石器群は未使用の製品・未製品によって構成されており、しかも用いられている石材からも明瞭のようにそれらは系統を異にした非在地系の石器群を多数含んでおり、唯一、石斧群だけが遺跡周辺に由来した在地系石器である。非在地系の石器群は石材・製作技術・形態で酷似しており交易・交換用に製作されたうえに運搬用に数点がパッケージされていた可能性を指摘した。遺跡を構成する石器集中は在地系と非在地系の石器群が見られ、しかもパッケージがそのまま残されたり、解かれたり、入れ替わったりなどの諸現象が見られることから、この空間が石器交換の機能を果たしていた蓋然性のたかいものと考えた。

石器交換に関する実態的行為については不明な部分が多いが、遺跡に実在する石器の組み合わせや配置・分布状態などに特異な現象が見られることから、何等かのルールが介在したことは間違いない。これまで異常とも言われることのあった石器群とその集中は、実はそうした系統を異にした集団が互いに石器をここへと持ち込んで交換しあう、そうした交換行為の累積によって形成されたものであった。神子柴遺跡の形成背景には旧石器から縄文への移行期、動揺する石器装備の変革とその安定的且つ効率的の入手を果す為と考え抜かれた石器交換システムの存在が大きく関わっていたと考えられる。

キーワード：神子柴遺跡、石器集中スポット、異系統石材、デポ、集積、交換・交易、石器パッケージ

## 1 はじめに

1958年の11月8日に神子柴遺跡に最初の発掘調査のメスが入れられて後、時を置かずして翌年9月には実質的な調査担当者でもあった林 茂樹氏が中心となって早くもその調査概要が纏められ、半年後の1961年には雑誌『古代学』第9巻第3号誌上に「神子柴遺跡 第一次発掘調査概報」が掲載されることとなった（藤沢・林

1961）。当時に於いては旧石器時代遺跡の空白地であった長野県伊那谷、天竜川の右岸段丘に開析された孤立丘上の先端部約21㎡の範囲から出土した87点の石器群は、それまでに知られていなかった大型の打製・磨製石斧、多様な石材を用いた均整で優美な石槍、均質的でバラエティーに富む石刃を素材とした削器、搔器、そして良質な黒曜石を用いた両面加工石器と石核、どれ一つを取り上げて見ても異次元とも言える完成された石器群の概要が逸早く広く学会に明らかとされるに至った。当該報告

1 明治大学黒曜石研究センター特任教授

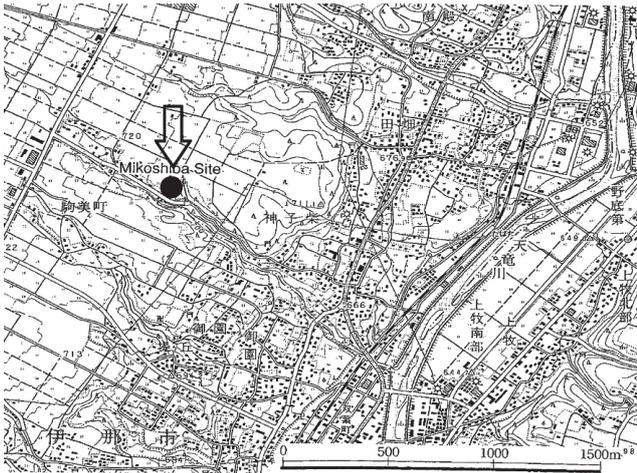


図1 神子柴遺跡の位置

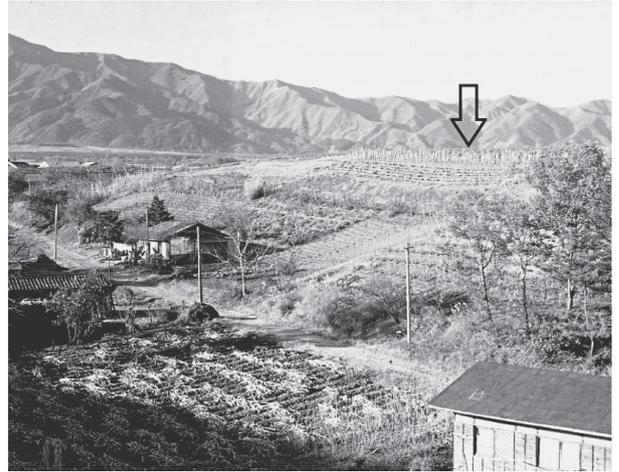


写真1 神子柴遺跡近景

は概報と呼ぶには違和感さえ覚える充実した写真・資料図版・属性表等を収録した重厚な報告文であり、「IV 結語」に至っては個別論文としての体裁・内容を持つ学問的水準の極めてたかいものであった点については改めて指摘するまでもない<sup>1)</sup>。

ところで、周知のとおり当該『古代学』の報告以後、神子柴遺跡と出土石器を巡っての解釈と評価は半世紀にも及ぶ議論や検討がなされつつも、研究者間に於ける見解の齟齬は稀に見るほどに大きかったと言わざるを得ない。簡略にその議論に関わる問題点のみを記すならば、第一に出土した石器群の性格付けの問題、第二として石器群の分布や配置等を巡っての遺跡形成に関する問題、第三として石器群の組成・系統に関する問題等々に纏めることができようか。ただしいずれの研究に於いてもこれらの問題が個別に取り上げられることは少なく、総体として複数の問題・課題が相互に関連し、神子柴遺跡の性格・機能やその系統などと言った複雑な文化的要素と関連しつつ議論される場合が殆どであり、旧石器時代最終末や縄文時代の遡源に関する研究やその具体的な移行問題など、多くの局面で神子柴遺跡とその出土品を欠いた議論・研究は皆無と言っても決して過言ではない。多くの研究者が真剣に取り組み議論を重ねてきた学問的経緯とその経緯を踏まえ、これを「神子柴論争」と呼称して以後の研究に備えることは決して無駄ではなく、今後の当該期研究に必ずや資するところがあるに違いない。

著者自身も長らくこの議論の末席に加わってきた一人として、半世紀以上の長きに亘る研究軌跡を振り返るな

かで幾つかの優れた研究成果も公表されたものの、根幹的問題とも言える遺跡に残された石器群の評価と遺跡自体の性格については、研究者間での統一的理解が得られていないばかりか、共通認識にも乏しい状況が続いてきたと判断せざるを得ない。言うまでもなく最大の要因としては正式報告の未刊行という研究条件が挙げられるべきで、それ故に分析・検討そして評価の論拠としての石器分布や出土状況に関する客観的判断が、長らく研究者間に於いて共通認識として定着しなかったと理解されてきた。恐らく「神子柴遺跡」の報告書刊行の暁には、それまで積み残された研究課題の基礎的部分が氷解し、新たな研究へと踏み出せるとの期待と希望を抱いていた研究者も多かったに違いない。

そのような研究状況を憂いた人々の努力によって2008年、遂に多くの研究者が待ち望んだ待望の報告書『神子柴』が刊行される。研究編を含めた本文331ページ、写真図版74プレートを所収した大部の報告書には、原寸に近い寸法で掲載された見事な実測図に加えて、発掘当時としては珍しいドットマップや微細図から復元された詳細な遺物分布図等々が掲載された。研究者の誰もが長らく待ち望んだ神子柴遺跡出土の総ての石器群が公表され、出土状況を含めたそれらの分布や組成・構成などが明らかとなり、ここに至り遂に多くの考古学的情報が研究者間で共有されることとなったのである。

しかしながら、不可解なことに研究者の誰もが長く渴望していた神子柴遺跡の報告書刊行以後、新たな研究の展開や方向性の模索・確立に至る議論や研究成果の公開

は低調と言わざるを得ず、基本的には「神子柴論争」の具体的な争点、そして主な研究課題として持ち越された諸点については2000年以前、特に1980～90年代に南関東を中心に新資料の発見が相次いだ時期と殆ど変わっていないとの印象を抱くのは決して著者一人ではあるまい。新たな移行期研究へと至る重厚な扉を押し開き、学史的論争として知られてきた神子柴遺跡の諸問題について一人の研究者として襟を正しつつ真剣に正面から取り組む必要性を痛感するに至った<sup>2)</sup>。その為には先ず半世紀以上前に記録された出土情報を基に作成された分布図、精緻な実測図、詳細な観察記録等々が詳細に記載された報告書を研究指針、「導きの糸」として神子柴遺跡の石器群構成とその成因・性格について論じ、得られた検討成果を基に旧石器から縄文への移行に関わる考古学的問題について触れつつ、今後の研究に繋がる新たな視点の提示が適えばと考えている。

## 2 スポットの構成

神子柴遺跡の石器群についてはこれまでも繰り返し指摘されてきたように、当該期に一般的に認められる石器組成である石斧、石槍、搔器、削器類、石核、砥石が出土してはいるものの、各石器形態の大小バラエティーの存在と技術的な完成度の高さ、石器素材となった非在地系石材を用いた多様な石材構成など、突出した内容及び様相を持った石器群である。加えて後に論争の火種ともなったのが製作痕跡を留めない石器と完成品の占める圧倒的割合と数量、更にその特異な出土状態等が長く研究者を悩まし見解の不一致の要因となってきた点については改めて指摘するまでもない。特に石器群組成の多数を占める石槍や搔・削器類、そして石斧、石核などが相互に、或いは個別に幾つかの有意な分布上の纏まりを有した現象に関する研究者間での理解と評価、そして単位性の意味や生成要因及びその背景に関する見解は多様であるうえに、最も根本的な問題とも言える遺跡成因とその年代的・系統的な理解に関しては、今なお意見の隔たりが大きいと言わざるを得ないのである。

本論でそのような研究状況と研究史の詳細を逐一説明

しつつ且つその検証に赴くことは不可能であるし、それは屋上屋を架するに等しい作業に終始するに違いない。研究現状を俯瞰しつつ著者が本論で新たに着目するのが従来の研究では唯一欠落していた視点と言えるスポット単位に見る石器群構成の時間幅という問題、これまでの議論や研究が神子柴遺跡の形成や点在した石器群構成が時間幅を持たない同時形成、共時態的存在との暗黙の了解を前提条件とされてきた点に関する疑問に端を発している。既報告論考を瞥見する限り研究者は例外なく数カ所の石器集中（スポットと呼称）によって囲まれ中央が空白となる、或いはスポットが連続してC字状を呈しつつ南側に開口した分布構成を想定しつつ、その成因・機能をどのように解釈し評価するかに研究の論点が置かれてきたとの印象は拭い難い。しかし同時に各石器集中箇所に関連性・同時性の確証が担保されるものか否か、石器集中スポットの相違について時間差をキーワードとして真剣に検討・議論するべき課題もあった筈である。略円形を呈する石器群分布が同時形成されたという確証はないし、実際は分布を構成する単位としてのスポットは相互の関連性よりも寧ろ個々の区域内での独自性を色濃く留めており、残念ながらそのような石器集中箇所相互の有意な関係性及び関与性を見出そうとする努力を過去の論文中に見出すことはできない。

以下、本論では同一形態の石器がこのような形成過程の時間幅、石器群の構成が同時ではなく単位的に独立したものであったとの論点を研究視座に据えることで、遺跡形成の問題に踏み入って行きたいと考えている。神子柴遺跡報告では石器分布に認められる一定の纏まりを基準に、直径が最小で30cm、最大で2m程の「石器集中スポット」a～fを任意設定しているが、点在した石器資料は何故かそこには含まれていない。両者の相違性及びに相同性を明確にする意味も含めて、最初に石槍集中のスポットb、石斧と搔器、黒曜石塊からなるスポットd・f、そして石槍、搔器、削器等で形成されるスポットcを取り上げ、本遺跡に於ける石器集中形成の特徴並びに問題点の整理を順次進めてゆきたい。

### <スポットb>

最初に石槍が集中するスポットbに注目してみよう。神子柴遺跡でも最も有名な石槍5点から構成されるス



スポット b



スポット d・f



スポット c

## 写真2 石器集中スポット

ポットでは、出土写真からも明確に理解されるように原位置を失った黒曜石製石槍 No.28は一旦除外すべきであろう。耕作土中へと10cm程浮いた状態で出土たこの石槍については遺跡発見の契機となった資料などと共に、近接して確認されている黒曜石製の石槍 No.29,30などと一体的分布を形成していた可能性もたかい。3点の黒曜石製石槍は透明度や夾雑物の混じり具合など石質は無論のこと、その扁平幅広な形態や製作に関わる技術的特徴なども酷似しており、素材原産地（諏訪星ヶ台群）から製作や運搬に関わる単位性を色濃く留めた石器群と認識されるからである。

同じ意味で No.14~17と番号の付され凝灰質頁岩・玉髓製の石槍4点についても、利用石材の系統性と共にその形態及び製作技術に見る同一（斉一）性は看過することができない。いずれも柳葉形状を呈するものの、玉髓製でも白色の2点（No.14,16）はやや幅広の形態を呈している一方で、No.15と17の石槍は玉髓と凝灰質頁岩と石材は相違しつつも細身に薄い典型的な柳葉形状へと仕上げられている。そうして尖鋭に作り出された両端部にも欠損箇所が一切見出されないことから、保護された状態で集積されていた可能性が考えられようか。その出土状態に目を向けると No.15・16が軸を揃えつつも一部先端部が重なるように設置され、更にその上位に先端部が重なり対向するよう軸方向を違えて No.17の石槍が置かれている。No.14の石槍は No.16と同じ白色系の玉髓を素材としているが、先端部は No.17と同じく北東方向に向け出土写真からは器体がやや斜位状態を保って出土したようである。恐らくこれら4点の石槍は2点を単位にその先端部を違え対向するよう重ねた状態で設置され

ていたものと考えて良いだろうし、2点を一組に先端部を交差させた状態で検出した出土状態を重視するならば、これらが意図的に梱包され小さなピット内に集積されていた蓋然性もたかい。

この周囲に目を向けると玉髓製石槍の集中箇所付近に先づきの黒曜石製品2点が北側に並び、東側にはそれらの場所に刃部を向けるようにして2点の磨製石斧が存在する。玉髓と凝灰質頁岩を用いた石槍のスポットと同様な黒曜石製石槍のスポットの存在をこの空間に認めると、両集中に接するように西側地点に単独の搔器（玉髓 No.37、珪質頁岩 No.32）が分布していることが注視される。さらにそれらを挟むように外周部の南北には黒曜石製石核2点（No.62,64）が分布し、こうした分布構成も何等かの意味を持っていたのかも知れない。

## &lt;スポット d・f&gt;

次に搔器、そして黒曜石塊（破片）から構成されたスポット d・f を検討俎上にあげてみたい。当該箇所の特徴として注目されるのが搔器類の出土状態にあり、最初に略南北方向に黒曜石製搔器（No.42）が置かれ、それに直交し恰もX字状となるように大型の珪質頁岩製搔器（No.35）が重ねられ、更にその珪質頁岩製搔器に直交（黒曜石製搔器に平行）した位置に玉髓製削器（No.45）と磨製石斧（No.6）が長軸を揃え並ぶように出土している。注視すべき点はクロスするように重なった搔器だけでなく、玉髓製削器も素材石刃の主要剥離面側を上に向けた裏返しの状態に置かれている点である。石器遺存に関わるタフォノミー検証が必要であることは十分に認識しつつも、こうした設置・配置の背景には人為による何らかの意図や意味を想像せざるを得ない。

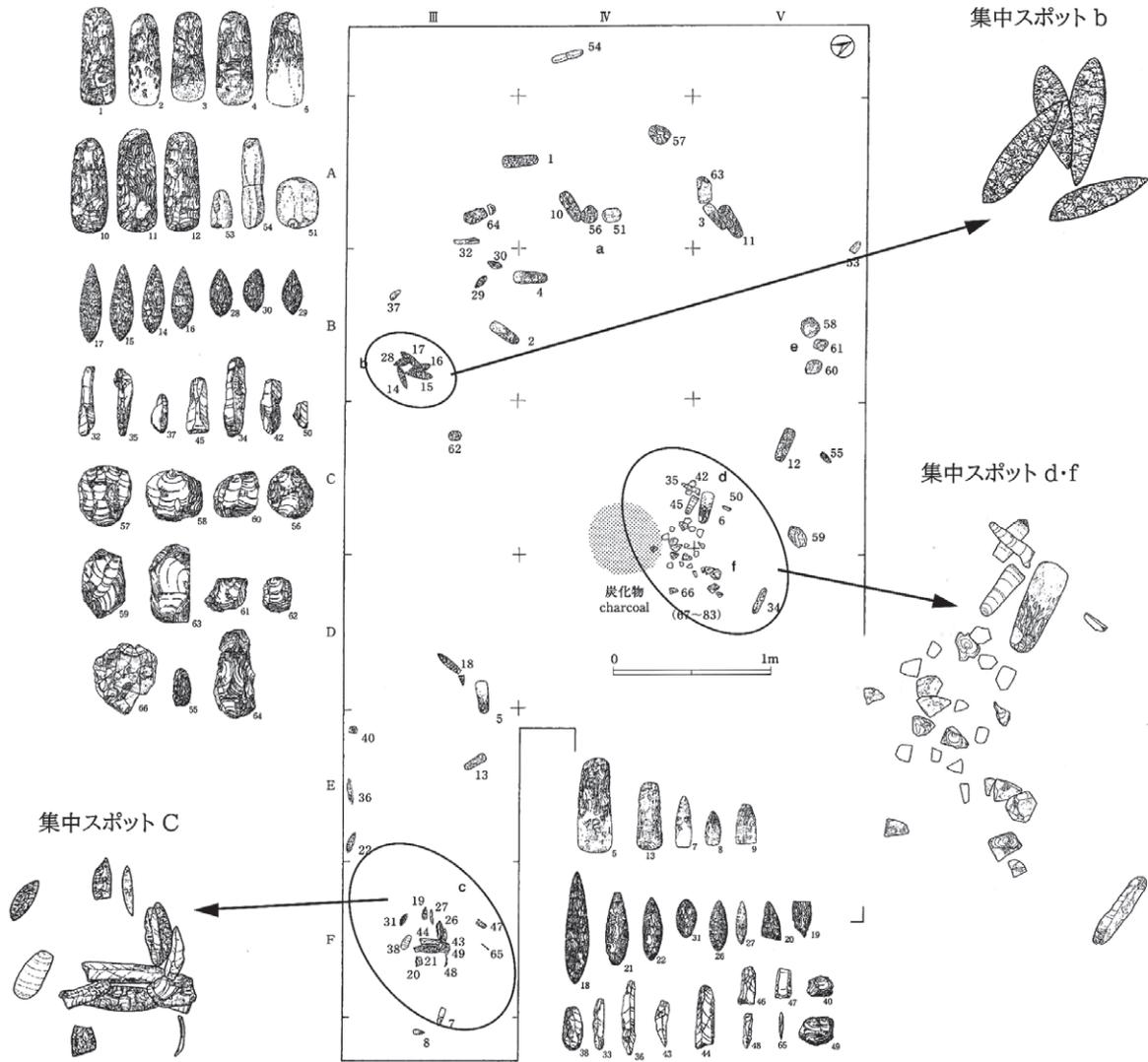


図2 石器群の分布と石器集中スポット

更にこれら石器群スポット d の南側に重複するようにして、径60cm程の範囲に黒曜石塊17点が分布するスポット f が形成されている<sup>3)</sup>。この石器集中スポット d・f の2か所が隣接した空間的な関係性だけでなく、他と区分可能な一体的単位としての空間的まとまりを保持していた点については黒曜石製の搔器 No.42と共に削器 No.50、そしてスポットの東縁部を仕切るように設置された大型の搔器 No.34が互いに接合関係を有している点からも肯首されよう。当該接合資料からは当該個体が作業面長20cm近くにも及ぶ直方体形状の大型黒曜石核の存在が復元され、ここに残された資料以外に多数の石刃が連続的に剥離されていた蓋然性がたかいものの、神子柴遺跡に残されているのは初期工程の石刃を素材に製作され

た搔器・削器の3点のみで、それらが同一スポット内に残されている意味は極めて大きいと言わざるを得ない。加えて出土層位や重複関係などから判断するならば、この接合関係を有する3点の石器が最初に設置されて後、玉髓製の搔器や大型磨製石斧が順次その間に置かれてゆくような分布形成の工程的姿が浮かび上がってくるのである。南側に分布する黒曜石塊へと復元された剥片類もこれらの石器分布に付随した、或る意味で一体的なものとするのが最も素直な解釈と言えよう。

#### <スポットC>

さてもう一つがⅢF区を中心に分布する石斧、石槍、搔器、削器等を含む、本遺跡でも最も複雑な石器群の分布構成を示す石器集中スポット c である。スポット c は

その中央部に下呂石製石槍と珪質頁岩製削器が長軸を揃えて略東西方向に並べ置かれ、長軸両端部には削器2点（東側に黒曜石製・西側に玉髓製）が恰も重ねられたように設置される。この東西方向を画するように並べられた長さ15cm前後を計る二つの大型石器（石槍：削器）を基軸とし、左右両側の空間の左（北）側では珪質頁岩製石槍、頁岩製搔器、頁岩製削器が、対する右（南）側では頁岩製削器1点が各々石器長軸を同一方向に揃え、基軸となった石槍・削器に恰も直角に交わるかのように直線の配置を持って並べられている。特に左側の3点の石器は一部が重なるような重複関係を持つことが図・写真からも判別可能で、最上位に置かれたNo.43の削器は基軸となっている削器No.44の上に明らかに重なるような配置関係を有していたことが分かる。また看過できない点は黒曜石製削器No.49を挟んで、その左右にこのNo.43と石材・形態を同じくしたNo.48の削器が配置されていることで、しかも両者は共に内側へと打点部を揃え恰も「ハ」の字状にその尖鋭な端部を外側へと向けるよう置かれている点で共通する。

左右を分かち当該大型石器の左側には他に2点の石槍（No.19, 31）が、右側では1点の石槍（No.20）が分布している。前者のうち黒曜石製の1点はその上半部を失った本遺跡では希有な欠損品で、凝灰岩製の小型石槍と軸方向を同じくし並ぶように出土している。対する右側から出土した黒曜石製石槍も同じく欠損品で、こちらはその下半部を欠いたものようである。この石槍群は先の削器類などと同じく、大型の削器・石槍に直交するようにその長軸を内側へと向けている。加えて左右に配されるように分布した石槍の欠損品は、他の石槍群のすべてが星ヶ台群産の黒曜石を用いて製作されているとの分析結果が得られている中、当該資料2点のみが和田土屋橋である。欠損品とは言え「等分割」とでも言うべき2点の石槍欠損品が、形態や石材産地を共有している点も単なる偶然とは考えられず、配置に際して何らかの意味を持たせていた可能性も考えておく必要があろう。また図示はされていないものの、報告書ではNo.9の凝灰岩製局部磨製石斧が本スポットの最下部、下呂石製石槍の西側、頁岩製大型削器の下から出土していたことが明記されており、その出土状態は報告書掲載の写真（図54）で

確認することができる<sup>4)</sup>。

こうして見ると小型磨製石斧の上に下呂石製石槍と頁岩製削器とを並べ、更にその両端部の上面に黒曜石製・玉髓製の削器を置いたうえで、左右の空間に長軸を揃えるようにして小型の石槍・削器類を配置するという一連の行為を復元することができるであろう。更に注目すべき石器分布の特徴として、恐らくスポット形成の最終段階に至って石槍・搔器の端部からやや離れた場所に、完成度がたかくリダクション痕跡を明瞭に留めた碧玉製搔器が裏返しの状態で検出されている点である。同様に搔器が素材剥離面を上位に裏返しの出土状況は先のスポットdでも認められたところでもあり、黒曜石・玉髓という石材差を超えて共にスポットの片側隅（外縁部）への設置という点でも強い共通性が認められ、こうした搔器の分布位置と裏返しという設置行為がスポット形成の工程と何らかの連動的意味を持っていたことを彷彿とさせる。

以上、神子柴遺跡にあって最も明確な石器集中スポット（b, d・f, c）三箇所の構成について主に器種、石材、分布等の特徴から丹念に紐解いてきたが、少なくとも残された総ての石器の配置及び分布構成が一時的に形成されたものではなく、時間的断続を挟みつつも明らかに継続した一連の行為結果として残された可能性が指摘できたのではないかと思う。

ところで、神子柴遺跡では上記した3箇所の石器集中スポットの他にも、黒曜石製石核が3個並んだスポットeや石斧を中心に砥石、石核、石槍などによって構成されたスポットaなどの存在が指摘されている。総ての石器集中単位としてのスポット群相互の有機的関連性や構成上の特徴の総てを理解することが非常に困難であることは、これまでの長い学史や幾多の論争が端的に物語っている通りであるが、今回はそうしたスポット理解の為にも石器分布が明らかに集中することに加えて石器どうしが互いに接したり重なったり、或いは軸方向を同じくしたり向き合ったりなど、構成上に人為による何らかの意図的行為が見出せる上記のスポット3箇所を対象に取り上げ分析・検討をおこなった。結果として石器集中が単に石器が空間的に纏まっているだけでなく、石器集中が形成される過程に明確なプロセスがあり、一定のルー

ルや規律・法則性に近いものがあつた可能性について指摘できたのではないかと考えている。しかも其々のスポットを構成した石器群を単に器種だけでなく石器製作技術や形態、使用石材種別など多角的項目に沿ってその単位性の構成と生成に着目することで、従来の解釈とは異なる神子柴遺跡の形成背景と要因、そして完成品のみが纏まって存在する遺跡自体の社会的役割やその機能面について理解する為の新たな解決の口が見えてきたのではないだろうか。

### 3 石器集中の構成原理

前章では神子柴遺跡を構成する石器群分布のなかでも特に明瞭な集中的分布と石器構成を認めることができる3箇所のスポットを取り上げ、その器種構成のみならず形成過程や分布状態を詳細に検討することで、それぞれが独自の様相と個別・個性的な性格とを併せ持つことが確認できたと思う。本章では一部の重複を覚悟で、再度、その特徴を一層掘り下げることでスポットの構成についてのより踏み込んだ議論に備えておくことにしたい。

先ずスポットbに於いて典型的に見いだされたように、同一器種からなる石器集中の単位構成が認められている。石槍4点は玉髓・凝灰質頁岩という日本海側（新潟県域？）に産出する石材を用いて製作されている点で共通するばかりでなく、入念に調整加工の施されたその形態とプロポーシオン等に於ける酷似性が際立つ一群でもあつた。先述したように当該スポットに於ける石槍4点はNo.15, 16とNo.14, 17、それぞれ2点一組の石槍群が先端部を交叉させて互いが向き合うように並び、そして重なり合うように配置されていた点は間違いないであろう。当然のことながら石材・形態・技術を同じくした石槍複数点が偶然このような状態を形成・保持し続けていたとは考え難く、前述したように著者はこれらの石器が樹皮・獣皮等で梱包された後にピット内へと収蔵される、そのような意図的行為を反映するものと理解している。

この石槍群に隣接した空間に3点の黒曜石製石槍（No.28, 29, 30）が出土していた可能性については先に指摘し

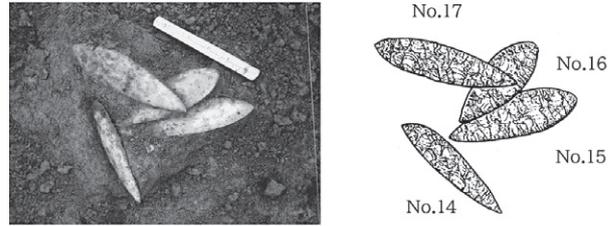


図3 石器集中スポットbの構成

たおりで、それらは蛍光X線による原産地分析でも総て諏訪星ヶ台群に由来することが判明しており、素材（原産地）・製作技術、そして似通った形態に加えて運搬・埋納にまで至るライフヒストリーを通じて、石器の単位性が頑なまでに保持し続けられたことを如実に物語っている。要するにスポットbを含め石槍分布が提起する重要な問題は、遠い石材産地に由来する石器群が石材獲得・加工・製作後の持ち出し・長距離運搬という時間的経緯のなかでもその単一性を一切崩さず、複数石器がそのまま神子柴遺跡内へと運び込まれていたという事実にある。恐らく人々は豊富な石材を擁する原産地で直ぐに使用する目的の為ではなく、先を見据えたうえで今後に必要な対外的な交換・交易用としても石器を製作し、それらのなかの数点を単位にパッケージとして纏めたものと推察される。そのパッケージを基本単位として石器群の長距離移動での携帯や経路上への集積・埋納が進められる、所謂「デポ」と認定されている事例の多くはこの単位を基礎として形成・構築されていると理解して間違いないであろう。

神子柴遺跡の重要性はそのようなライフヒストリーを色濃く留め、且つ単位性を強固に保持した石器集中スポットと時間的経緯と共に単位性が崩された石器集中、そのような双方の姿が石器分布数か所に認められることにあり、スポットbが前者の典型であるとするれば後者に該当するのがスポットd・f、そしてcであると言えよう。ならばスポットeの黒曜石製石核やスポットaに見る石斧などについても同様に理解され、遺跡を離れた場所で産出する石材を素材に石器製作が進められ、酷似した形態の複数石器をパッケージとして梱包したうえで長距離移動を経て持ち込まれ、パッケージのままに配置・保管・埋納等がなされたのではないだろうか<sup>5)</sup>。

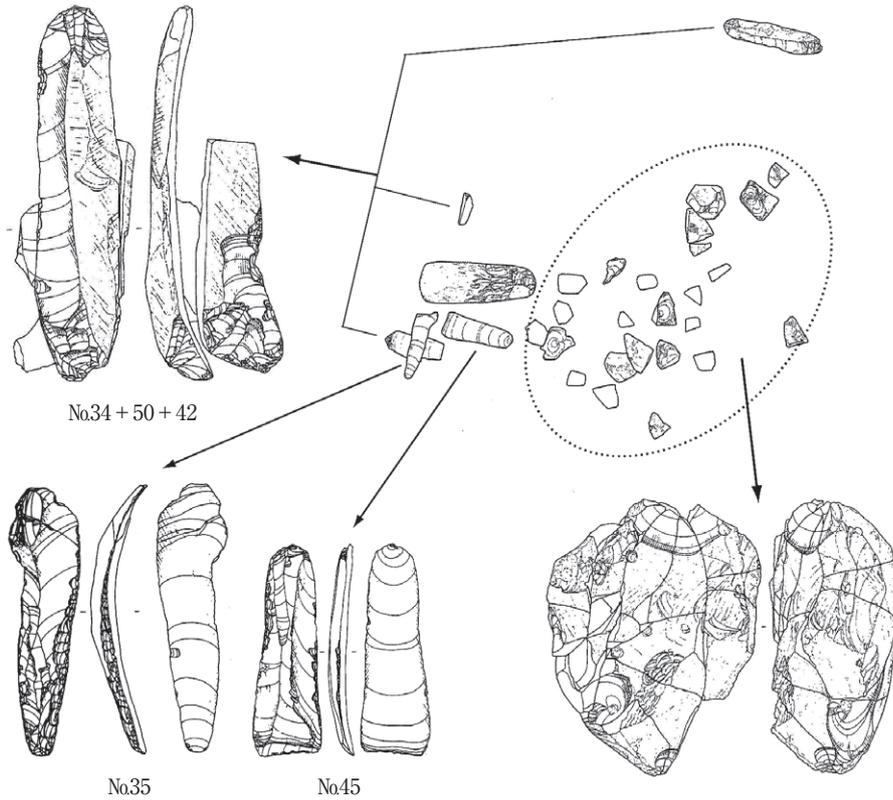


図4 スポットd・fの石器分布と黒曜石塊

続いて前章では石器集中スポットd・fを取り上げその詳細を逐一検討したが、そこで従来は見過ごされてきた幾つかの興味深い事実を指摘することができた。当該スポットでは剥離工程初期に連続的に剥離された黒曜石製大型剥片を素材とした搔器3点を、略等間隔に配置することからスポット形成が始まった蓋然性がたかく、最初に搔器No.42が湾曲した主要剥離面側を上に戻しの状態で置かれていることから、それが何らかの意図的背景を有していたことを物語っていると言えようか。続いてこれに呼応するように珪質頁岩搔器(No.35)が長軸を違えて同じく裏返しの状態で設置され、さらにその脇には軸方向が90度で交わる位置に玉髓製削器No.45がやはり裏返しの状態で検出されているのである。従来は見過ごされてきたこのような一連の石器設置行為については意図的行為の反映と解するのが適切であろうし、搔・削器の素材面を上位とした裏返しの状態や石器を互いに重ね合わせる行為は、石器それ自体のみならず継続的に石器スポットの構成要因に何らかの意味を持たせる為のものであったと判断しておきたい。

これまで殆ど検討されることも無かったスポットcは、神子柴遺跡のなかでも最も興味深い石器群構成と配置性を持つものと評価すべき対象であり、しかもその石器集中の形成を工程的に追認することが可能なことも提示できたのではないかと思う。即ち、当該スポットでは最初に白色凝灰岩製の磨製石斧を置いた上に異器種、異種石材である石槍No.21(下呂石)と削器No.44(珪質頁岩)の長軸を揃え並べるように設置し、その両端部に同一器種でありながら黒曜石・玉髓と素材となった石材を違えた削器No.49,46の2点を配置する。このような大型石器を長軸方向に配した後、その端部の上下に他器種の石器を

置くという行為は、有名な福井県鳴鹿山鹿遺跡を始め幾つかの「デポ」でも確認された行為・現象であるが、このスポットcでも同様に基軸となる石器配置に恰も直交するような状態にその左右の空間に石槍・削器等を配置している。石器の配置は特に西側(左側)に於いて著しく、特に珪質頁岩製の石槍No.26、搔器No.33、そして削器No.43が重なるように並べられ、更に特徴的なことはNo.43,48の二つの削器がその基部を内側に揃え先端部を外

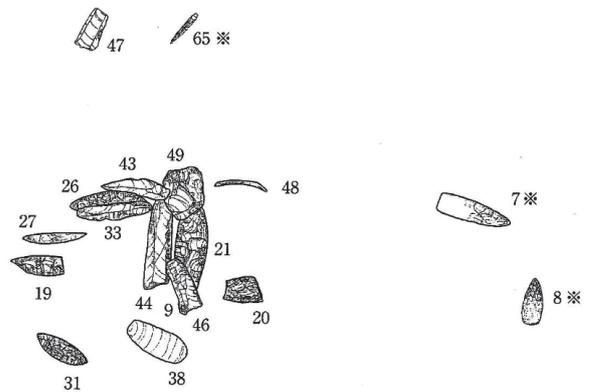


図5 スポットcの石器分布

側に向けて「ハ」の字状となるような配置性を持たせている点は既に指摘したとおりである。石槍と大型削器によって区画された左右の空間が、石器集中の形成に際して明らかに機能的に区分・弁別して認識されていたことを明示している。加えて何故かこの二つの空間それぞれには神子柴遺跡では珍しい中央部で破損（或いは分割か？）した石槍が1点ずつ検出されているが、この2点のみが本遺跡で唯一の和田土産黒曜石を用いている点も見過すことができない。

スポットcの南西部端には完成度が極めてたかい優美な碧玉製搔器が裏返し状態で存在する点については上記したとおりで、同様な搔器配置は先のスポットdとも共通している。また、改めて搔器類の分布を概観するとスポット縁辺部での検出空間という共通性、また石槍（黒曜石・玉髓）集中箇所についてもその西縁部からも同様な搔器（No.37）の出土状況を確認されている。正確な出土位置が不明であるNo.39の玉髓製搔器についても第Vトレンチ発掘品であることを考慮すれば、本来的にはそれがスポットdに帰属したものであったと判断して間違いあるまい。ならばこれら3点の玉髓製搔器、しかも他の搔器類とは明らかに相違した実用品として刃部再生が繰り返された搔器、長幅比が2.5：1程度の典型的な小型精製搔器のみが三箇所の石器集中スポットに1点ずつ点在している事実は、果たして何を意味しているのだろうか。また著者が注視するのは搔器類の分布特徴としてそれらが集中することなく、特に大型の珪質頁岩製搔器（No.32, 36, 35, 33）が石器集中スポットのそれぞれに単独に恰も均一的に分布している点にある。こうした特徴と共に看過できないのがスポットdの黒曜石製の大型品も含め、これらの搔器類のいずれもが何故か共通して剥片剥離過程の初期段階に生産された剥片を素材に用いていることであり、しかもそれらの刃部形成を担った調整加工が剥片端部に僅かに認められる極めて微細な刃部加工しか観察されていない。分布と共に素材と加工部位、微細な調整加工など特異な搔器の一群の存在にも注意を払っておく必要がある。

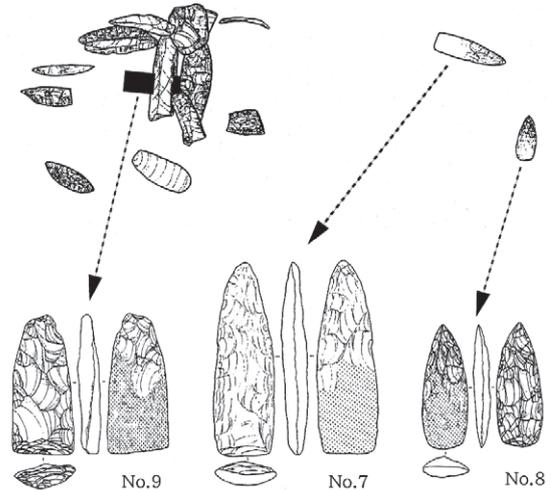


図6 スポットC 小型磨製石斧の分布状況

#### 4 石器集中の背景と系統

神子柴遺跡の石器群が在地／非在地と認識される異系統石材を交えた石器群に由来して生成されたものである点は、研究の初期段階から注視されていたことから、著者も残された石器群の性格・系統に関わる問題について、研究の当初より異系統石材をキーワードに解析を試みたことがある（栗島 1988）。その後は報告書中に於いて中村氏による各系統の原産地の特定研究が推進されたことで、現在では石器群の構成・成立についてより一層踏み込んだ議論が可能となっている。まずは新潟県域に産出するとされた珪質頁岩・玉髓を石材とする石槍、搔器、削器、石核、長野県中央部の星ヶ台・和田・鷹山などの黒曜石を用いた石槍、搔器、削器、石核、そして神子柴遺跡周辺の伊那谷に産出する黒雲母粘板岩、砂石等を素材とした石斧、岐阜県中部の下呂石を用いた石槍、更に詳細な石材産地の同定が未了とされながらも新潟県？と推察された凝灰岩製の小型石斧等に大別することができようか。見落とせない重要な事実、同じ器種でありながらも石材を単位として遺跡内での分布や配置・構成等に明らかな相違が顕在化している点で、その典型として具体的にスポットbの石槍類の存在を例に挙げたところで、スポットcに於いても黒曜石の石槍と他石材製石槍との分布が決して親和的でなかった状況は先に見た通りである。同様な意味でスポットdに於ける搔器の

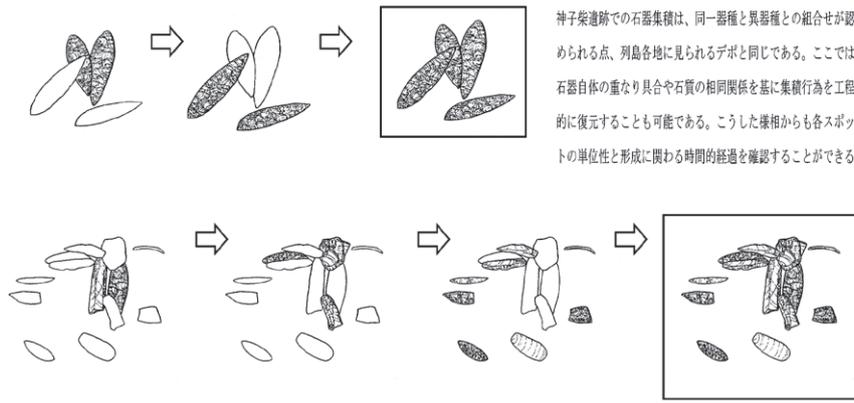


図7 石器配置工程の復元（上：スポットb 下：スポットc）

神子柴遺跡での石器集積は、同一器種と異器種との組合せが認められる点、列島各地に見られるデポと同じである。ここでは石器自体の重なり具合や石質の相同関係を基に集積行為を工程的に復元することも可能である。こうした様相からも各スポットの単位性と形成に関わる時間的経過を確認することができる。

在り方は象徴的とも言え、異系統石材の場合は差別化を図る為であったのかわざわざ器体長軸を交叉させ配置したらしい様子さえ伺われた。

石材による空間的な差別化の好例と認識されるのがスポットcの石斧群である。神子柴遺跡では石斧がスポット周辺に配置された傾向も注視されるが、ここでは3点の小型磨製石斧その総てが非在地系石材とされる凝灰岩を用いたものである。当該石器は刃部が直線的平縁形態を有するのに対して基端部は先鋭で、研磨面は大きく片側にのみ留まっているという技術的共通性で貫かれており、製作以後の持ち出しや移動、埋納という時間的経緯を超えてなお一貫した単位性をそこに見出すことが可能である。スポットcが石斧No.9の設置から始まり複雑な配置構成をとりつつ順次形成されていった可能性については先に述べたとおりであるが、他の小型磨製石斧（No.7・8）も当初の設置時点でNo.9とは距離を隔て設置されたものであった蓋然性がたかい。何故ならば全く同様なスポット形成の端緒がスポットdでも確認されている。即ち接合関係を有する大型黒曜石製搔器3点が間隔を空けて置かれ、それを契機として以後に石器集中が形成されていった可能性を指摘したところである。

このような観点から集中域を持たない単独出土資料へと目を向けると、例えばNo.18の大型石槍（下呂石製）やNo.22の石槍（黒曜石）も単独で出土し、珪質頁岩製の大型搔器No.32, 36なども同様な分布状況を示す。これらの資料は近接分布した石器との関係性を積極的に探るよりも、寧ろ単独資料として石材による差別化を反映した分布、即ち遺跡への持ち込まれ方の違いを示してい

ると理解すべきなのかも知れない。総てのスポットが時間的・行為別に独立した単位とは到底考えられないものの、数次回の石器配置や集積・埋納などの行為が時間的な経緯と共に重複した結果、略C形状に近いサークル様の石器分布が形成された蓋然性がたかいと判断されるべきである。先に指摘した同一石材を用いた石槍の形態的類似性とその分布、接合関係

を成立させている搔・削器の同一スポット内での分布、石材や石器種別を意識して形成された埋納デポにも類似したスポットcの石器配置など、いずれもそれぞれの配置・埋納行為が明確な単位制を帯びており、その形成は基本的に短期であったこととスポット相互間での有機的関係性が見出し難い点については、ここで改めて説明する必要もないであろう。

従来の理解・学説では、複数の石器集中スポットの形成が時間的に併行したもの、即ち遺跡形成を共時態の範疇のなかで捉え評価することを前提に議論がなされてきた為、その研究は必然的にスポット群を構成する石器群相互の有機的関係性を見出そうとする方向へと傾倒せざるを得なかった。だが著者は報告書の石器分布図を中軸に据えたうえで石器群様相を仔細に分析・検討するなかで、そのような観念的根拠が曖昧で前提条件として成立し得ないとの認識を持つに至った。同様な理解に立脚するならば、大型の黒曜石製石核も同時に置かれたものと断定されずに、No.58, 60, 61の3点の纏まりとNo.57, 63などは、それぞれが単位性を持ちつつ互いの分布形成が時間差を持った、言うならば断続的行為の累積と見做すことが可能となろう。同様に石斧に関してもNo.3, 11やNo.1, 10, そしてNo.2, 4などもまずは同時にそこに置かれたものではなくて断続的な配置行為の累積、即ち遺跡形成に係る時間幅のなかでの反復行為を反映すると把握した方がより適切であると考えている。

では何故そのような断続的な行為が連続しつつも、厳格に石材別・器種別の纏まりや分布が形成され続けたのであろうか。実はその点こそが神子柴遺跡形成の背景要

因であり、遺跡の果たした本来の機能的役割を反映するものであったと推察している。例えば玉髓製石槍と黒曜石製石槍が同一集団によって神子柴遺跡へと持ち込まれたとすれば、当然のことながら石材や製作技術別の纏まり（単位性）が製作・移動に関わる時間的経緯の中で保持しきれなくなり、移動途中で石器群が再パッケージされることで両者が混在的な様相を示して当然であろうが、神子柴遺跡を形成する石器分布スポットを瞥見するなかでもそのような分布や構成状況を見出すことは一切できない。石器製作の痕跡を留めない所謂「デポ」では、移動の過程での仕分けや使用に伴う消費・補充のなかで製作直後の単位性は徐々に崩されて交換・消費へと転化する運命にあった筈である。当該期の各地に認められるデポの殆どが製作遺跡からの持ち出し用や移動経路上に設置された補充・補給用の「石器集積デポ」と様相を同じくする点は以前にも指摘した

が（栗島 1990）、該当箇所での特定石材への偏重や規格的とも言える製作技術、結果としての石器形態に見る酷似性は顕著な現象として確認された。だが、神子柴遺跡ではこうした括りで理解される石器集積は僅かにスポットbの石槍群にのみ限定されてしまうようであり、他の石斧、石核などの石器形態に同様な傾向を読み取ることは到底できない。

さて、神子柴遺跡に於ける同様な石器集中箇所に於ける石器群の単位性を概観してみると、ここに残されたものは当該期石器組成を構成する石器群が一時的、一括的に残されたものではなく、使用石材からも端的に伺われるように周辺各地から断続的に持ち込まれた、系統・来歴を異にする石器群と解すべきであろう。代表的な石器形態であ

る石槍を取り上げても、石材から判断されるそれらの經由地は新潟県方面（珪質頁岩・玉髓）、八ヶ岳周辺（黒曜石）、そして岐阜県下呂付近（下呂石）に由来した、或る意味で開放的とも言えるベクトルを認めることができ、搔器や削器、そして石核などにも目を向けた場合にも同様な指摘が可能となろう。こうした非在地系石材を基本として系統的にも異なる石器群の存在に対して、神子柴遺跡の地元である伊那谷に産出する石材に依拠し製作された石器形態が打製・磨製の石斧群であることは多言を要しない。注視しなくてはならない点はここ神子柴遺跡に於いてはほぼ唯一石斧のみが、広範且つ均等とも言える分布状況を形成している点であり、特に北側のC字状の分布域でその傾向が顕著に伺われる。加えて石斧の多くは偶然なのであろうかその刃部を略西方向に揃えた状況が見出されるが、それに対向するような位置に石

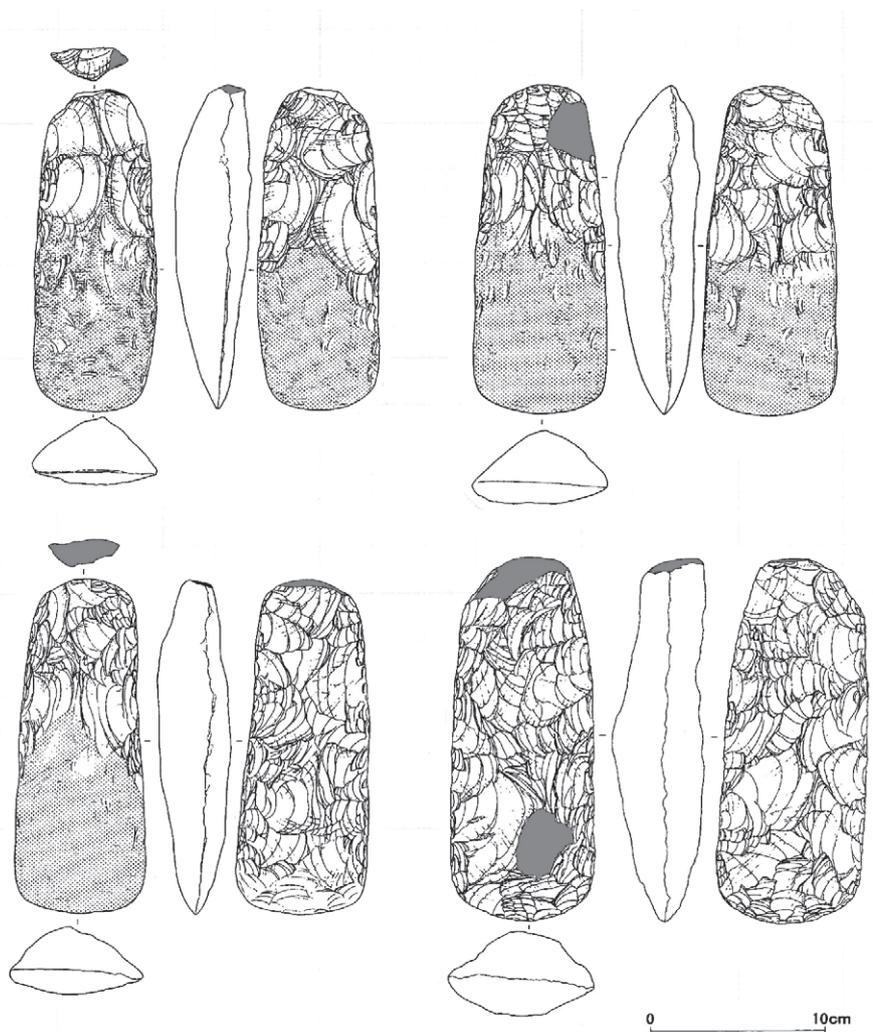


図8 石斧に残る素材礫面（アミ部分）

核を中心とした黒曜石製品が配置された分布傾向も指摘できそうであるがどうだろうか。

ところで神子柴遺跡に於いて黒曜石原産地はともかく、珪質頁岩や凝灰岩、硬質頁岩産地の総てを包括的に生活領域とした集団の存在やその広範な領域圏の周回行動を予想することはそもそも不可能であることから、神子柴遺跡には異種石材に依拠した石器群の存在によって示唆される生活・移動領域を異にした複数集団のそれぞれが石器集中の形成に関与していたと考えておきたい。即ち他地域に生活根拠を持ちつつ周回遊動する集団が複数方向からこの場所へと断続的に石器を持ち込む一方で、彼らが目的とした異系統石器との交換やその獲得を果す、そのような石器獲得に収斂・顕在化した行動系の痕跡をここ神子柴遺跡に残された石器群の中に読み取っておきたいのである。これまで生活跡や集団墓などと捉えられることも在った特異な石器分布を構成する各スポットは、実際には搬入時の集積、保管にともなう埋納、そして交換に際する持参した石器設置など一連の行為現象の累積、しかもその断続的な交換行為を反映しているであろう。一様な在り方を示さないスポットの構成こそが、実はそれぞれが同時に形成されたものではなくて時間幅を持ちつつ、断続的に進められていった石器交換の姿と実体、その形態を如実に反映していると理解できないだろうか。

最も重要な点はここ神子柴遺跡に残された石器群のほぼすべてが、基本的には完成品か完成間近の状態で遺跡内に残されているという動かしがたい資料的事実にある。この点は従来の研究でも積極的に取り上げられることが皆無に等しかったものの、実は本遺跡の性格や機能を考える場合、個別的な石器形態の枠を超えて共通した最も重要な属性であり、それこそが遺跡の性格や機能を考える場合に重要なキーワードと認識されるべきであったことを改めて指摘しておきたい。次にこの問題に関する論点の概要・要点のみ簡潔に述べておこう。

神子柴型とされる磨製石斧の刃部箇所を使用痕跡が見出せないことは、使用痕分析の成果からも肯定された周知の事実とも言え、また打製石斧を磨製石斧製作の工程品として位置づけるべきか否か等々の問題もある。著者が注目するのは石斧群中にその基部や基端部、そして胴

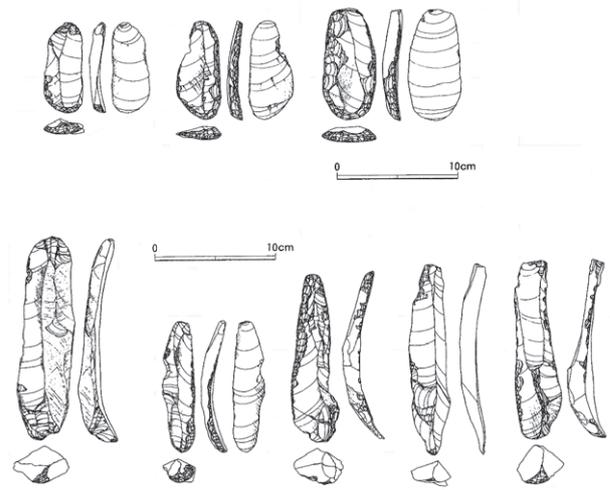


図9 搔器に見る二様相（上：再生品 下：未製品）

部などに素材となった石材の礫面（自然面）を残存させている例が散見される点にある。残存する自然面には平坦な部位のみならず凹凸状の起伏を持つ面構成を持ち、石斧側縁部に於ける入念な調整剥離と対照的な在り方を見る限りその残存は極めて不可解であり、加えて自然面の該当する箇所が基部や基端部などと言った、言わば石斧装着に関わる最重要箇所である点は決して無視すべきではない。こうした属性を鑑み著者はこれらを入手後に最終的な手直しや修正の余地を残した一群、未使用と近似した交易・交換用の石斧として再評価すべきと考えている。

石槍についてもこれらが使用されて後に遺跡内へと残された、通常の廃棄品と同一に理解する研究者は少ないであろう。当該期に於いて石槍の一群は通常粗い両面加工が施されたブランクの状態を持ち運ばれ、使用に際して最終的な器体調整が施されるのが通例であるが、ここ神子柴遺跡に於いては整形やメンテナンスに関わる剥片・破片類が完全に欠落している。石槍に関しても完成品や一部自然面を残した未使用品の状態で神子柴遺跡に残されたとの解釈に矛盾点は見当たらず、特に黒曜石製品に未製品が顕著な傾向が伺われる一方で、玉髓や頁岩、そして下呂石製の石槍はより完成度がたかい点は、搬入経路やその時間幅を考えた場合には合理的に評価することができようか。

もう一つ神子柴遺跡を特徴付ける石器群である搔器類に目を向けた場合、同様な現象がより顕著に見出される

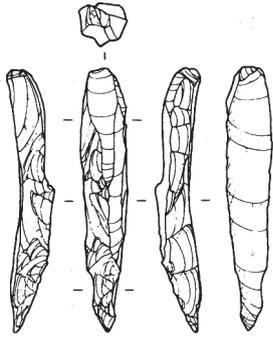


図10 玉髓製削片

点については注目されて  
 良いだろう。石刃ではなく  
 明らかに搔器用の素材  
 として持ち込まれた一群  
 の石器は、以後の度重なる  
 刃部再生が繰り返される  
 運命にある器種属性を  
 踏まえた結果であるの  
 か、縦長剥片のその末端  
 部分に僅かに微細な調整  
 剥離が施されているだけ  
 である。恰もそれは搔器  
 としてこれら一群を他剥  
 片と区別する意味での一  
 種の識別的加工に留まる  
 かのような微細で限定的  
 な刃部調整に留まってお  
 り、こうした刃部調整加  
 工が果たして搔器として  
 の機能を担うに十分であ  
 ったとは考え難い。しか  
 もいずれも剥片末端部に  
 素材形状を変えなく設け  
 られたその刃部加工は、  
 搔器一般に認められる  
 素材剥片の湾曲部相当箇  
 所に設けられたものとは  
 明らかに相違している。  
 こうした諸属性を踏まえ  
 確認したうえで、著者は  
 これらが搔器製作用に準  
 備された交換を目的とし  
 た素材、或いは未製品の  
 側面の強い資料であった  
 と理解すべきとの立場を  
 とっておきたい。

以上、神子柴遺跡出土の石斧や石槍、そして搔器の

一群は交換を前提とした  
 一様に未製品として理  
 解すべき特徴を備えてい  
 ることを述べてきたが、  
 更に注目すべき資料と  
 して本論では所謂石核群  
 、そのなかでも特に「両  
 面加工品」として分類さ  
 れてきた一群 (No. 56,  
 57, 58, 60, 62) の石器  
 についても同様な理解が  
 可能である点についても  
 触れておきたい。従来か  
 ら明確な打面を備えてお  
 らず、しかも作業面が表  
 裏に及び規格的な剥片の  
 連続的剥離の痕跡を留め  
 ないこれらの資料を積極  
 的に石核として評価する  
 ことに躊躇を覚えた研究  
 者も多かった筈であり、  
 少なくとも明確な石核類  
 (No. 59, 61, 63) との相  
 違点は際立っている。し  
 かも「両面加工」の資料  
 群には例外なくその表裏  
 面に自然面を残存させて  
 おり、石刃など大型剥片  
 の剥離を目的としていな  
 いことは誰の目にも明ら  
 かである。著者は当該石  
 器の形態や器体調整時の  
 剥離痕跡や下縁調整の存  
 在、縦断面形がD字状に  
 近似することで示唆され  
 る打面部側の準備、加  
 えて削片剥離用に準備さ  
 れる縁辺部の凹状微細調  
 整の存在など共通した特  
 徴がそこに見出せること  
 を考慮し、これらの両面  
 加工品を削片系細石核用  
 ブランクとして再評価す  
 る立場にある。玉髓製の  
 作業面作出用削片 (No. 65)  
 の出土が確認されている  
 点もこうした理解が決し  
 て唐突ではないことを示  
 唆しているが、何よりも  
 両面加工品を削片系細石  
 核素材と再評価すること  
 で、石器形態や調

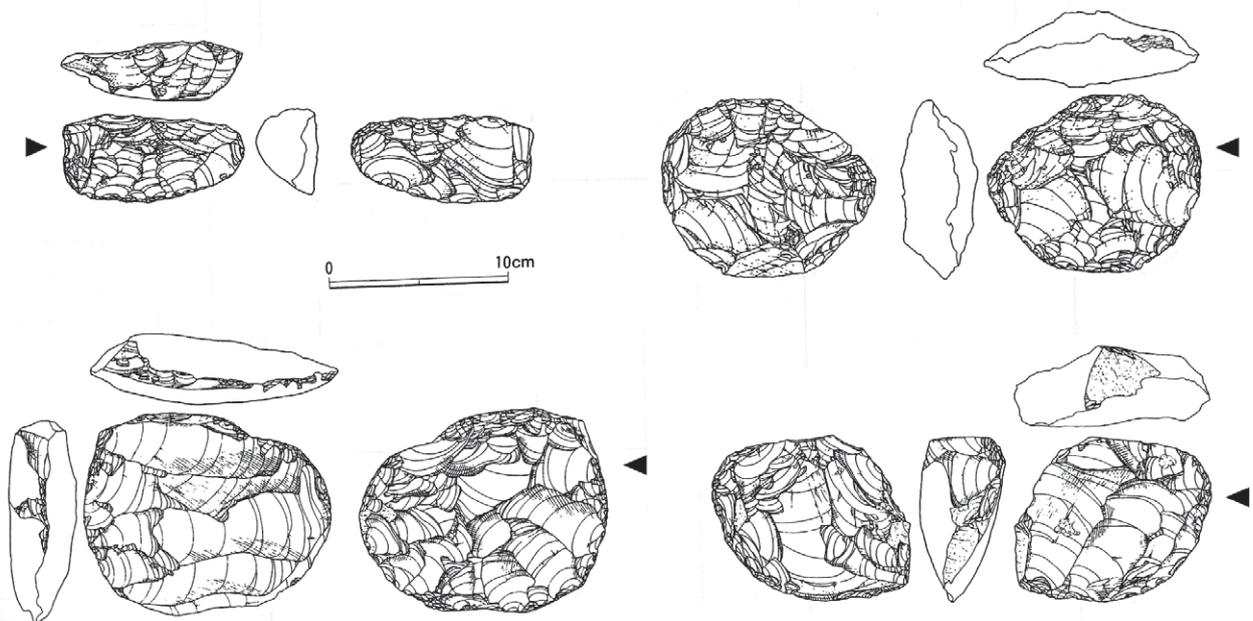


図11 「両面加工品」と分類された細石核原形 (◀は削片作出用に準備された側縁調整部位)

整加工部位を合理的に説明することが可能となるだけでなく、石槍・搔器・石斧などと共に両面加工石器を細石核素材と再評価することで、未製品や完成品を集積した神子柴遺跡の石器群構成の特徴・性格をより一層明確、且つ的確に矛盾なく再評価できるのである。

以上、神子柴遺跡に残された石器群は完成品と共に未製品や準備品とも言える、入手後に直ちに使用可能な或いは僅かに調整加工を施して手入れするだけで製品として使用可能な石器群によって占められた一種特異な性格が浮かび上がってくる。しかも重要なのはそれらの石器群の生成が単一石材によってではなく、原産地や来歴を離れた異系統の石器群によって成立している点にある。こうした系統性を離れた石器群の持ち込み状態(単位性)を端的に示すのがスポットbであり、その非在地系石材による異系統石槍は集積・埋納され可視化されることで対価となる石器との交換の機会を待っていたのであろうか。或いはこれ等玉髓製石槍群を残した人々は既にこの地で対価(等価)と認識し、何らかの了解の基に自らが必要とした石器なり他の資源・物資を入手した後、その対価として複数の石槍を置いてこの地を去っていったと想定することもできる。常識的に捉えればそのように非在地系石材を用いて製作した石器群を携えた人々が渴望し交換目的とした石器とは、神子柴遺跡が所在する伊那谷領家変成岩帯からの産出石材を素材とした大型石斧であったと推測してよいであろう。では何故、ここ神子柴遺跡の地に異系統石材の存在によって示される他地域の人々が訪れ、それぞれの地域に産出する石材で製作した完成状態の石器を複数残していったのであろうか。

神子柴遺跡出土の磨製・打製石斧群は、上伊那地区に発達する領家変成岩帯中の石材(黒雲母粘板岩・砂岩・緑色岩)を用いて製作されたことが指摘されている。逆に遺跡が所在する伊那谷には石槍や搔器・削器などの剥片石器製作に適した劈開性に富んだ剥片石器の製作に適した石材に乏しく、当該期の主要石器組成を装備するには他地域からの石材入手、或いは石器自体の安定的確保を果さなくてはならなかった。同じ問題は他地域の集団も等しく抱えていたものと推察され、特に神子柴型と称される断面三角形の大型石斧製作に適合する石材確保は決して容易ではなく、しかも製作途上の破損や技術的問

題や携帯・補充に関わる難易度等を考えると剥片石器一般のように石核を携帯しつつ随時、石器製作を遂行することで装備の補充を心掛けるという行動システムは機能せず、完成品や未製品を持ち歩くかといった選択肢しかなくなってしまう。だが各地の地域集団が自らの生活領域内で石材を確保して石斧装備を維持していた様相は認められず、現実的にもそれは極めて困難なことであったに違いない。旧石器的な石器製作システムからの脱却を計りつつある当該期の人々は、移動生活を送る中で黒曜石、頁岩・玉髓、下呂石などそれぞれの地域集団が在地石材を用いて製作した石器を携帯しつつ持ち寄り、入手困難な石斧を中心とした当該地域産の石器入手を果すことで、効果的且つ効率的に必要な石器装備の補充・充実を図っていたのではないだろうか。そのように考え評価することによってのみ神子柴遺跡での突出した石斧数量とそこに含まれる完成品と未製品、当該地を生活領域越境域とした地域集団が未使用の石斧製品を多数準備して交易に臨んでいた点についての合理的解釈が可能となるであろう。見落としてはならない重要な点は彼らが交易用の石斧に加えて、わざわざ仕上げ・整形・修正用として用いる敲石や砥石までも遺跡内へと持ち込み、恰も「石斧加工キット」としての持ち出しを可能としている点など、その付加価値をよりたかめる為に腐心した形跡さえもそこに留めている点にある。

## 5 石器交換の空間

嘗て神子柴遺跡とそこに残された石器群について、生活領域を異にする複数集団がこの場所集って石器を交換した場所であるとの認識を示したことがあった(栗島 1990)。主たる論拠は神子柴遺跡では石器製作の痕跡を伴わずに完成した石器形態のみが纏まって出土すること、何よりも出土石器の多くが遺跡周辺では入手できない遠隔地に由来した石材を用いていること、しかもそのような複数系統のルートを介して持ち込まれた石器が遺跡内の複数スポット内に点在するという石器群構成の特徴などを踏まえたうえでの評価であった。加えて当該期の生活跡としての痕跡を明瞭に留めた神奈川県寺尾遺

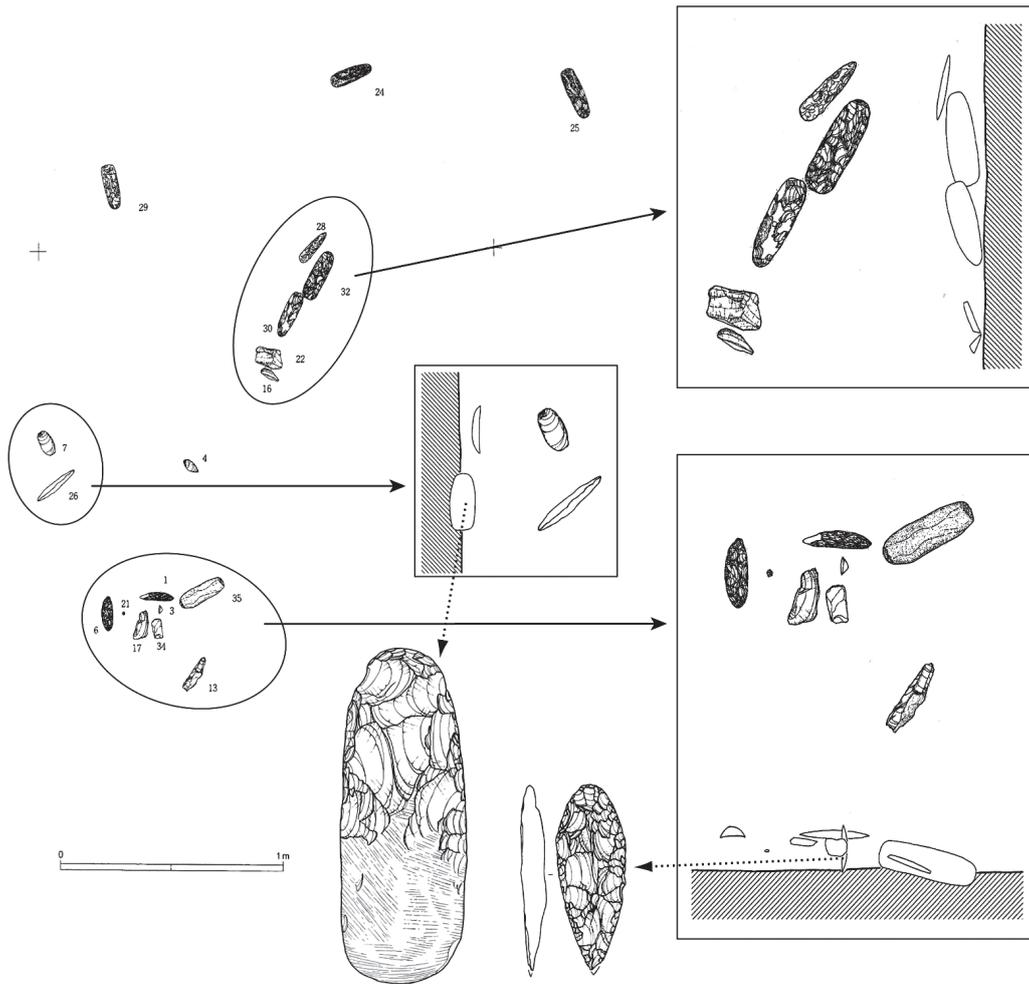


図12 唐沢B遺跡の石器分布と集中スポット（石斧は斜位、石槍は縦位で出土）

跡や月見野上野遺跡、勝坂遺跡、茨城県後野遺跡、青森県大平山元I遺跡などと比較すれば神子柴遺跡の特異性は明らかであるし、寧ろその石器群構成や分布に認められる集積状態からは所謂デポとの類似性を強く伺わせることも考慮したうえで導きだされた解釈でもあった。現状に於いてもこうした理解・評価に関しては基本的に変更の必要性を感じてはいないものの、著者が神子柴遺跡理解の前提条件として石器群構成が相互に時間差を有していない、言うなれば異系統石器を持ち込んだ時点での交叉的交換を想定していたことは紛れもない事実である。報告書刊行を契機として詳細な検討が叶った現在、遺跡形成の要因や石器集中の機能的背景についての理解は変わらないものの、幾つかに分断されるような空間的単位性を持ったスポットと捉えられた各石器集中が最小の単位であると共に、各々が石器交換の行為を具体的に示すまさに「単位スポット」であると認識するに至って

いる。そのような単位は同一集団のなかの複数ではなく、基本的には石器交換を目的にこの地に断続的に集った複数の人々の構成と行為の累積を反映している蓋然性がたかいものと判断して良いのであろう。そうした視点に立脚した場合、看過できないのは出自・系統を違えた石器群が神子柴遺跡という狭小な空間にではなく、それを構成した僅かに径1m程度のスポット内に於いて共存しているという事実にある。スポット内での構成については石槍集積に見られたように一定のパッケージを保った事例もあるが、スポットd、cに顕著なようにパッケージが解かれたうえで再集積されることが通例であったようにも見える。スポット内でそれぞれのパッケージが解かれて再集積される行為に連動して遺跡外へと持ち出された石器があったに違いない。調査区北側を典型とする中央部が空白となったスポットなどは、石槍集積に類した何らかの石器パッケージがそこから持ち出された形跡を

示しているであろう<sup>6)</sup>。

本章では神子柴遺跡の性格・機能について基本的に上記のように評価・理解することの妥当性について、他遺跡との比較研究を通じて検証しつつより鮮明にできればと考えている。その為に同じ長野県内から発見されている唐沢B遺跡と小鍛冶原遺跡の石器群を検討俎上にあげ、これらの遺跡群から検出された石器群の比較研究を通じ改めて各遺跡の性格・機能について検討してみたい。

唐沢B遺跡の石器群は黒色頁岩を主要石材として用いた石斧群と主に硬質頁岩を用いた石槍・搔器・削器・剥片類とに概略二大別される。分布域の北側に石斧群が分布していることが明瞭である反面、南側を中心に非在地系石材である硬質頁岩製の石器群の集中が認められている。看過できないのは神子柴遺跡で見られたような特異とも言える石器の出土状態がここ唐沢B遺跡でも確認される点で、スポット e では磨製石斧 No.26 に対峙する場所から検出された頁岩製削器がその素材面を上にした裏返し状態で検出されたことが確認できる。注意してみるとその石斧自体もその側縁部を上にして斜位に置かれたような状態で出土しており、ここでも神子柴と同様な石器の意図的な埋設行為が指摘できそうである。また、ブロック 1 とされた石器集中の南端部からは凝灰岩・頁岩製の石槍や搔器・石刃・剥片類の出土が報告されているが、その中央部付近には石槍が恰も土中に突き刺さった極めて特異な出土状態が記録されている。当該スポットを良く見ると北側には珪質凝灰岩製の石槍が軸方向を東西に置き、その左右南側には硬質頁岩製の搔器 No.6 と削器 No.13 とが長軸を南北に揃えて設置されているように見える。言わばコの字形に囲まれた中に硬質頁岩製の石槍、微細な黒曜石製の調整剥片、大型の珪質凝灰岩製の剥片が並べられていることを看取することができる。しかもその大型剥片は明らかに軸方向を揃えて並べられている。またここでは剥片石器に混じって大型の敲石が残されているが、その周囲からは関係すると考えられる石斧類の出土は確認されていない。神子柴遺跡で指摘したように石斧整形キットの一つであったと認識すれば本来、付随した石斧群がこの箇所に配置されていた可能性もあり、その交換代償としてこれらの剥片石器群が配置・集積されたのであろうか。



写真3 小鍛冶原遺跡出土石器  
(単一スポット：パッケージを反映)

神子柴遺跡と同じくここ唐沢B遺跡に於いても遺跡形成が同時になされたような状況、石器群形成に関わる共時的態動を見出すことは困難であると考えられ、むしろ時間的断絶を含む石器交換の累積的行為をそこに想定した方が良さそうである。スポット d とされている集中では略南北方向に石斧が3点並べられ、南側には珪質凝灰岩製の剥片2点とその長軸を東西方向に揃えて設置されている。剥片2点の置かれた位置や方向については先に見た南側のスポット f での No.17, 34 のそれに類した状況を指摘することができるのであろうか。南側の集中では未検出の石斧類が多く出土しているのが北側のスポットの特徴であるが、No.29, 24, 25 はいずれも単体であることからこれらをスポット d に含めるべきか、或いは単体のスポットとして理解すべきかの判断は難しい。同じくスポット e, g, h などと区分された単独出土の石器について同様であろう。No.7 の搔器と同じく No.4 の硬質頁岩製の片面加工石槍も主要剥離面を上位とした裏返しの状態で検出されているが、その周囲からは石器が検出されていない。

ここ唐沢B遺跡の石器分布に見る最大の特徴は、大きく南北二つの集中と捉えてみた場合に東側では南側に搔器や削器、石槍などの頁岩製石器を主体とした構成が見られる一方、北側では黒色頁岩製の磨製石斧群が分布していることにある。先の神子柴遺跡での異系統石器群の石器集中に於ける構成を参考とすれば、北側の石斧群の配置要因は恐らく異系統石器である頁岩製、黒曜石製の搔器や削器、石槍などとの交換用にそこに置かれたもの

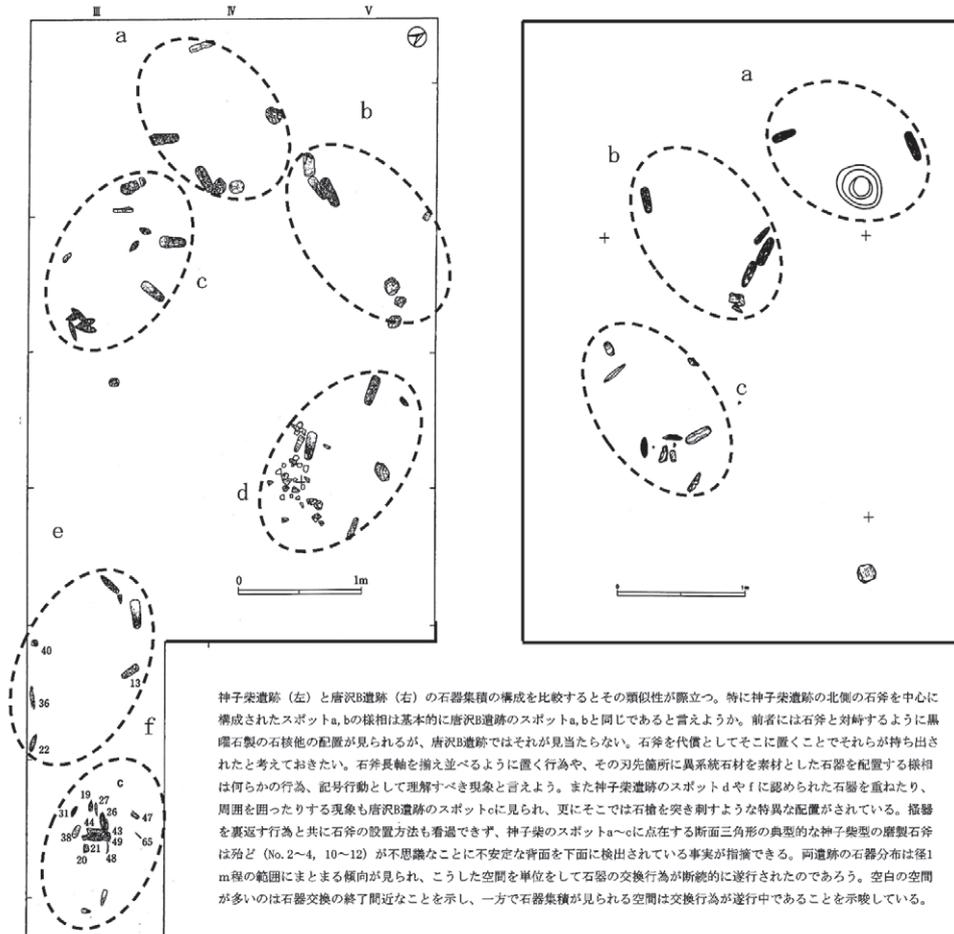


図13 神子柴遺跡 (左) と唐沢B遺跡 (右) の石器分布に見るスポット構成

と解釈できよう。基本的に石斧以外をそこに見出せないことがそうした交換行為を反映しているのであろう。一方の南側の石器集中では対照的な様相を示し、周囲を含めて磨製石斧を見出すことができない。こうした系統を異にした石器群の対立的様相が、空間的にも顕在化している点が唐沢B遺跡の最大の特徴と捉えられるべきと言えよう。両者の関係性を暗示するのがスポットeであり、裏返して置かれた削器と側縁部を上にした磨製石斧との対峙は、本遺跡の機能や器種構成を違えた分布等を考えた場合に極めて示唆的でさえある<sup>7)</sup>。

これらの遺跡と共に興味深い調査事例が小鍛冶原遺跡である。神子柴遺跡から天竜川を約20km下った右岸河岸段丘上に位置した小鍛冶原遺跡では、8点の黒曜石製石槍と1点の頁岩製石刃が発見されており、その内の7点の石槍は桑畑での天地返し中に「重なった状態」で発見されたものと報告されている。黒曜石製石槍群は一瞥する限りでも相互の形態的類似が極めて顕著で、その表

裏両面或いはいずれかの面に素材となった平坦な角礫素材面を残存させていることから未製品状態にあることが明確で、蛍光X線を用いた原産地推定からは8点総てが諏訪星ヶ台産黒曜石を用いた一括性、単位性の強い石槍群であることが証明されている。原産地で製作された製品がその単位を崩されることなく遠距離地へと運ばれ、特定場所へと埋納された典型的事例として認識することができよう。

ここで著者が注目するのは黒曜石製石槍群の中に頁岩製の石刃 (搔削器素材?) が組成している事実にある。頁岩製石刃の組成参入の意味することは、単純にこの石槍群が諏訪星ヶ台で製作された8点の一つの纏まりとして包まれ、一括状態を保つパッケージのまま伊那谷中央の小鍛冶原遺跡へと運ばれてきたのではないことを雄弁に物語っている。恐らく諏訪地域を生活領域にする集団が、その領域内で製作した黒曜石製品を一旦神子柴遺跡のような石器交換空間へと持ち込み、そこで黒曜石製品

を渴望している在地集団が石斧等の提供を通じて異系統石材で製作された石槍群と交換したものと推察されるのである。同時にそのような機会を通じ通常ではその確保が困難な頁岩製石刃を確保し、後の移動生活で必須となる良質な頁岩製搔器或いは削器の製作に備えたものと評価しておきたい。

このように通常的生活領域や移動経路の中に於いての確保が困難な遠隔地域産の石材とそれをを用いた優美な石器群（恐らく地域石材に適応した技術的な地域格差が生成し、製品の出来栄に反映していた可能性もある）の確保、しかも複数系統の石器獲得が可能となる機会と場所、そのような社会経済学的な機能を有していた一つの空間こそが神子柴遺跡であったのだろう。唐沢B遺跡にしても小鍛冶原遺跡にしても明言できる事実は、これらの遺跡を生活跡として捉えることは現実的に不可能であるという点で、高原地形の中に位置する唐沢B遺跡の石器分布がその周囲に広がる可能性は皆無である。一方、平坦な河岸段丘上に位置する小鍛冶原遺跡でも、平成4年に周辺一帯が大規模な工業団地造成地に認定されたことから石器出土地点を中心として広大な面積を対象に発掘調査が実施されたものの、その成果は「遺構、遺物ゼロという結果」であったという。同様な状況は神子柴遺跡でも確認されたところであり、遺跡周辺では大規模な土地改良工事に伴い広大な段丘面一帯で試掘調査が実施されたものの、結果的には縄文土器を始めとした遺物散布が僅かに認められただけで、肝心の石斧・石槍等の遺物や遺構の発見には至らなかったことは良く知られているところである。

小鍛冶原遺跡や唐沢B遺跡でも、そして何よりも神子柴遺跡に於いても実はそこは人々が日常生活をおこなった生活跡としての性格を持つ遺跡ではなく、普段は出会い、接触し、交わることのない生活領域を異にする人々が自ら製作した石器群を持ち込み、保管・集積しながら異系統の石材・石器と交換する機能を持った特殊空間であった可能性を改めて指摘しておきたい。そのような石器交換に関わる行為が対面的なものであったのか、或いは僅かに時間差を持ち対面行為を欠いた一種の「沈黙交易」に類する形態が採用されていたのかについての断定は困難であるものの、集積や埋設・埋納行為を伺わせる

痕跡の検討結果に立って判断する限り、個人的にはこの遺跡での石器群交換行為が時間差を介在させていた後者に近い形態であった可能性を考えている<sup>8)</sup>。

改めて神子柴遺跡の石器集中へと視点を戻すならば、恐らくスポットbなどは目的とした石器確保の後に代替・交換を目的として集積・埋納されていた可能性がよい。スポットf・dでは黒曜石・珪質頁岩製の同一器種を互いに裏向きに交叉させ、さらにその傍らに玉髓製削器と黒雲母粘板岩製石斧が配置されており、複数の人々が機会を改めつつ断続的に石器を交換していたことを彷彿とさせている。そのような光景を映し出した証左として著者は裏向きに搔削器を置く行為は、石器交換に対する集団間での何らかの意思表示、具体的には記号論的意味を含んだ意匠行為ではないかと推察している。一方でスポットcではあたかも中心軸に石器を配置して、その左右に空間を設けているようにも見えるし、この目印を基準として目的とする石器群のやり取りを異なった集団どうして進めていたのであろうか。そのように理解すると北群の石斧の纏まりや黒曜石石核からなるスポットeなどは、それぞれが目的、希求した石器入手を果たした後、彼らが携帯した石器を代替・交換用としてその場に置いたものであったのかも知れない。先に交換用の石器を提供した人々は再訪時にそれを持ち帰るか、或いは緊急でない場合はそのまま埋納して次回の補充時に備えるという選択・選別的な行動も当然考えられて良いであろう。そのような断続的ではあるが回帰性が確約された行動のなかで遂行される石器交換であったが故に、生活資材一般の石器装備が揃いつつも欠損品がなくスポット単位の数量や構成石器の多様性が生成しているのであろう。本論では比較的良好な状態で神子柴遺跡に於ける石器交換行為を、言わば静止状態に近い状況に留めたスポットb, c, d・fの分析・検討を中心に、その背後で進められた交換の単位や実態をできる限り追求したつもりであり、スポットを単位として明瞭な偏在性はまさに交換行為の進行状況とその実態を反映していると解釈しておきたい。

## 6 おわりに

神子柴遺跡を巡る論争は発見から半世紀以上を経た今日に至っても、未だに決着のつかない研究史上に残る大きな課題であると同時に、研究者にとっては尽きない魅力に富んだ様々な研究課題をそこに内包している。活発な議論が戦わされた1960年代以後も、断続的ながら神子柴遺跡を中心とした移行期の諸問題は多くの人々が課題として取り組んできており、従来とは違った斬新な視点から当該期を見直す動きも胎動するなかで、今後は神子柴遺跡を巡る論争も確実に新たな展開を迎えるであろう。

そうした変容しつつある研究情勢のなか本論では原点(=原典)に立ち返りつつ、或る意味で頑なまでに神子柴遺跡の出土石器とその出土状態という論争の根幹の問題に焦点を当てつつ分析・検討をおこなって様々な角度からの解釈と問題提起を試みたつもりである。石器分布についてはあくまで報告書掲載の図面や写真、そして記載事項に準拠しつつ自分なりの論点の整理と絞り込みを経て解釈への道筋を明示した。無論、空間的配置や相互の分布的関係性の意味を探る場面に於ける根幹の問題でもあるタフォノミー研究に対する無視・無知との誹りを受けかねない危険性については十分に承知しているが、そもそも規則的とも言える分布的纏まりや意図的配置性などの痕跡を留めた考古学的事実を直視すると共に、従来は見過ごされてきた神子柴遺跡の石器群が明瞭にローム層中(-10~20cmレベル)から出土している点も十分に認識しているつもりである。石器群の出土層位が斬移層ではなく明らかなローム層中、しかも近接する尖頭器文化期の御園牧ヶ原遺跡はもとより茶臼山遺跡に匹敵する深度に包含されていた事実は何らかの埋納行為を反映していると理解すべきで、その要因や行為背景にはピットなど遺構内への埋納だけでなく、獣皮や樹皮などでの梱包行為の介在も視野に入れておくべき点については再三触れたとおりである<sup>9)</sup>。湾曲した搔器や断面三角形の石斧を裏返して置いたり、石槍の先端部を交叉させたり、異なった石器を上下左右に組み合わせたりした状況が調査時に確認できたのも、これらの石器が何らかの形にパッケージされていたか、或いは設置後にその上

を何かで覆ったうえでの埋没であった蓋然性がたかい。

著者はここ神子柴遺跡に複数集団が移動生活を送るなかで自らの生活領域内で産出する石材を用いた石器を持ち込み、互いの集団が日頃は獲得困難な他地域の石材で製作された石器を互いが交換する場、それは周遊回遊的な移動生活を送る集団にとって一種の兵站基地にも相当していたと評価している。だがそれは異系統の石器獲得のみが唯一の目的ではなく、当然、他の背景と要因についても考慮しておくことが不可欠である。何故ならば、そもそも神子柴文化自体が旧石器からの移行に伴って石器製作技術のみならず、石器組成やその装備・補充に関する変革期でもあった点で、当然のことながら石器運用に関わる回帰周遊やそれに伴う石器補充や石材確保に関する一大転換期であったと推察されるからである。神子柴遺跡自体が異系統の石器交換をこの場で果し得た背景にはそうした石器石材補充のメリットと共に、広域移動に伴うリスク回避を打開する為の適応行動としての社会経済学的な意味を持つのであったことは、直前に位置する湧別技法削片系の細石器群様相からも肯首されるであろう。更新世から完新世への目まぐるしい環境変動の移ろいのなか、新たな環境に身を置く彼らが道具立てを一新しつつ石材や石器の獲得・補給・交換という適応行動を採用した、まさにその意味でもここ神子柴遺跡が縄文文化の幕開けを告げる象徴的な遺跡として再評価されるべきなのである。

最後になってしまったが、今回の研究に限らず実に多くの方々の教えや議論を通じて学んだことに深く感謝したい。また、今回の研究成果はすべて神子柴遺跡の報告書を読み込み、分析したことで得られたものであり、刊行に多大な努力をされた方々にもお礼と感謝の言葉を添えさせていただきたい。

### 註

- 1) 神子柴遺跡調査概報が活字となった1960年前後は、岩宿遺跡に於いて最初の旧石器確認以後、茂呂遺跡(1951年)・茶臼山遺跡(1952年)でナイフ形石器、上ノ平遺跡(1953年)・武井遺跡(1954年)では槍先形尖頭器、そして矢出川遺跡(1954年)で本邦初の細石器の存在が確認され、岩宿遺跡の層的事実を検証・補強する事実確認を得つつ、層位と石器組成に基づく旧石器時代の編年大綱が構築された直後でもあった(杉原1956)。長

野県では茶臼山遺跡に続き、馬場平遺跡・中ツ原遺跡(1953年)、手長丘遺跡(1956年)が相次いで調査され、更には北信の杉久保遺跡の石器群が再評価(芹沢・麻生1953)される状況のなかで、神子柴遺跡での信州ローム層中からの多数の石器群出土を目の当たりとした研究者の驚きは想像に難くなく、そうした学史的な背景を汲み取ることも神子柴論争を理解する場合には極めて重要と言えるであろう。

- 2) 神子柴遺跡発掘調査60周年を契機として地元伊那市開催された2018年の「神子柴シンポ」。それぞれの個別発表を聞き、その要旨を熟読する過程での痛感したことは、恐らく殆どの研究者でさえ神子柴遺跡の報告を十分に吟味し、検討していないという事実にあった。その際に痛感したことは、神子柴論争を一步でも前に進める為に最も重要なことは新規で斬新な解釈ではなく、学史的な観点から論争を見直しつつその問題点や論点を整理する為にも遺物・遺跡へと立ち返っての地道な研究が不可欠との反省にあった。本論の執筆の動機はまさにそこにあったと言っても過言ではない。
- 3) 従来、成因に関する評価が分かれていた黒曜石塊については、その剥離面の特異性から「被熱」や「加撃時の破損」に原因が求められていたが、近年では原産地での産状(火砕流中に包含された黒曜石原石)により同様な破碎や剥離面形成が生じることが問題提起(栗島2019)されたことから、原石が石器素材として神子柴遺跡へと搬入された可能性が新たに浮上した。当該個体は直方体形状に近く自然面は曲面ではなく平面形状を呈していることなどから河床面の転石由来ではないことは明らかだが、その自然面は平滑で角や陵などの部位は残っていない。このような復元原石に見られる特徴は、例えば長野県鷹山遺跡の黒曜石採掘坑に広がる白色粘土中に包含された黒曜石と共通しており、その成因が「火砕流噴火の際、火道付近にあったものが吹き飛ばされ、火砕流によって運ばれた」(長和町 2017)資料と評価することで合理的に理解できる。原石形状を保ちつつも小さな加撃や掘り出し時の僅かな衝撃でさえも、火砕流由来の圧力や堆積中の土圧によって縦横に生じていた亀裂箇所から一挙に破碎するケースがあり、本資料も被熱痕跡もなく破損面に残る同心円を描くリングの存在などから同様な資料と考えて良いだろう。
- 4) 神子柴型とされる重厚な大型石斧とは明らかに様相を異にする凝灰岩製の小型磨製石斧3点、その総てがこのスポットcからの出土であるという点も見過すことはできない。大型の所謂「神子柴型」とされる一群が在地系の凝灰岩や砂石、粘板岩など在地系石材を用いているのに対し、その大きさや重量だけでなく形態や製作技法、研磨状況などの諸点から著しく相違した小型磨製石斧3点が互いに来歴を違えたものとは考え難く、一体的或いは一括的にパッケージされたうえで埋納等の対象として扱われていた可能性はたかい。しかもNo.9の石斧が石器集中の中央尚且つ最下部から出土していることを考え

ると、スポットcの形成が小型磨製石斧の設置を契機としていたと捉えることもできようか。

- 5) スポットbに見られるような特器的器種の単独構成の姿から、黒曜石石核からなるスポットeや石斧から構成されるaなどの形成を読み解く鍵を得ることとなる。一つの可能性としてこれらがパッケージを崩さずに残されている背景として、単にそれらをここに放置したのではなくて長距離に渡って持ち込んだ石器パッケージをそこに置き、代わりに何らかの対価となる石器を入れ替わりに持ち帰ったことが想定されてこよう。彼らが等価と見做した代替品をここで確保したからこそ、それに見合う石器をそこに纏めて集積・埋納するという行為をスポット構成の背景に想定しておきたいのである。
- 6) 神子柴遺跡の各スポットに見る石器群の構成は、実はこうした石器の集積行為の動機・要因とも言える石器持ち出し行為を如実に反映したものであったと見るべきであり、想像しがちな本来の姿をそこに見出そうとすることは不可能なことを認識しなければならない。石核や石槍が纏めて置かれているのは、対価となった石器が持ち出された結果として理解するのがより合理的であり、同じく石斧が残されているのも同様に解することが可能である。石斧の刃部に向き合うように黒曜石製石核や下呂石製石槍を置くのは何らかの交換交渉の行為と考えることはできないだろうか。
- 7) 神子柴遺跡で確認されたスポットの在り方から判断すれば、唐沢B遺跡の石器分布は南北二つのスポットの構成として理解できるのかも知れない。南北それぞれのスポットに於ける石器構成から在地系石材を用いた磨製石斧の持ち込まれた北側のスポットと、頁岩を中心とした搔器・削器・石槍などの異系統石器が持ち込まれた南側スポットとの違いが際立っており、唯一、スポットeとされた空間でのみ両者の組み合わせが確認されている。だが、北型の石斧群に囲まれた空白箇所の存在からは本来、その場所に頁岩製の石器類が集積されていた可能性がたかいし、南側の石器分布には磨製石斧の持ち出しに関わる何らかの記号論的な意味を持っているように感じる。特に石器配置の規則的からは神子柴遺跡のスポットcとの共通性が指摘できそうである。
- 8) 神子柴遺跡が残されているのは天竜川右岸の河岸段丘上に形成された孤立丘上である。ここから東に進むと南アルプスから諏訪、そして八ヶ岳へと通じ、西へ進めば中央アルプス北部域から権兵衛峠の鞍部を抜け木曾や御嶽、更には飛騨地方に続き、一方で北側は塩嶺山地を超え松本平、更には北信、越後方面へと繋がってゆくまさに移動経路上の要所と言うことができる。同様な立地景観を有しているのが唐沢B遺跡であり、菅平高原に残されたこの遺跡は南へと下ると佐久平、東に下れば吾妻川から群馬方面や北関東へと通じ、北側へと下ると長野盆地や野尻湖方面、そして山伝いに進めば飯山や新潟方面への最短ルートとなる。神子柴にしても唐沢Bにしてもある程度の標高を持つ場所に遺跡形成が見られるのは、

彼らの移動経路が基本的に水系よりは分水嶺を選択することで移動に関わる過労や移動リスクの軽減を意図していたからなのであろう。

- 9) 神子柴遺跡の石器群が深くローム層中から出土していることは既に第一次調査時点で確認されていたことで、林氏は報告書収録の調査日誌のなかで「石器の包含層位は黄褐色土層（ソフトローム）上面より10~20cm」であることに注意を払っている。特にスポットcのNo.26の珪質頁岩製の石槍は「第Ⅲ層下18cmを記録」したこと、また有名な下呂石製の大型石槍No.18は「先端部が……ローム層下10cmの深さに検出され、胴部は約1週間後に「更に15cm下に……斜状に包含されて」発見されたことが記録されている。後者などの状態は唐沢B遺跡のNo.3硬質頁岩製の石槍の出土状況に類似しており興味深い。いずれにしても石器群が明らかにソフトローム中に含まれている事実は重要で同じ伊那谷の佐竹中原遺跡などに共通した深度を誇り、また茶臼山遺跡の石器出土層位も軟質ローム上面から10~20cmであったことが報告されている。また林 茂樹氏は神子柴遺跡の西方約500mに所在する御園牧が原遺跡で小型ナイフを伴う尖頭石器群を調査し、「不思議なことに神子柴の石器を含む層位よりも浅い地層に含まれている」事実に注意を喚起していたのであった。

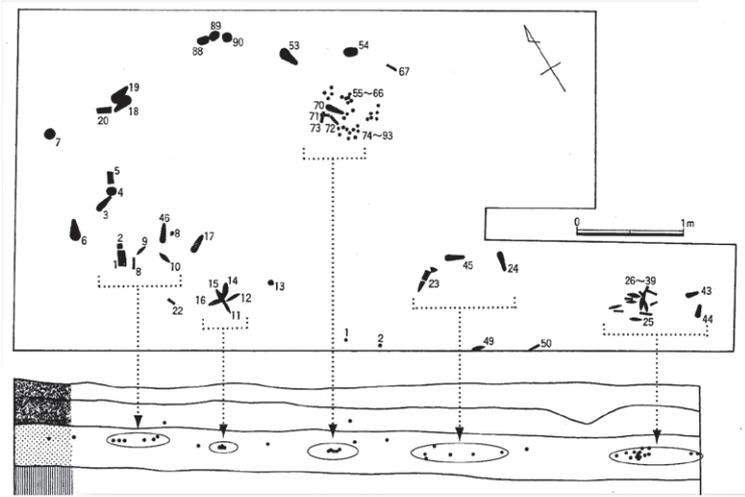
改めて石器群の垂直分布図（総てではなく基本的にトレンチⅢからの出土遺物が土層図に投影）を眺めると、石器群の出土層位が記述のとおり軟質ローム層中に包含され、しかも上位方向への移動（分布）が少ないことに気付く。大型石器が多いことが原因とは考えられず、また石器群が単に旧地表面に置き去られたものではなく何らかの遺構内に置かれる。しかも特異な配置性などに見られる良好な遺存状態を考慮するならばパッケージ等に伴う梱包・包装などの行為を考えることも必要であろう。序ながらカラー写真が残されたスポットcの図版（PLATE 10-18）には、石器集中箇所付近に周囲よりもやや暗い暗褐色土層が広がっていることが確認でき、ここに掘りこみ等の遺構が存在した可能性を示唆している。

#### 引用文献

- 安斉正人 2001 「長野県神子柴遺跡の象徴性 —方法としての景観考古学と象徴考古学—」『先史考古学論集』第10集 pp.51-72  
 安斉正人 2003 『旧石器社会の構造変動』同成社  
 稲田孝司1991 「細石刃文化と神子柴文化の接点 —縄文時代初頭の集団と分業・予察—」『考古学研究』第40巻第2号 pp.21-46  
 稲田孝司 2001 『遊動する旧石器人』岩波書店  
 稲田孝司 2018 「神子柴石器群の成立過程とその意義」『シンポジウム 神子柴系石器群とはなにか?』第20回

- 長野県旧石器研究交流会 pp.5-10  
 岡本東三 1999 「神子柴文化をめぐる40年の軌跡 —移行期をめぐるカオス—」『先史考古学研究』第7号 pp.1-22  
 岡本東三 2006 「細石器文化と神子柴文化の危険な関係」『石器に学ぶ 第9号』石器に学ぶ会 pp.1-44  
 栗島義明 1990 「デボの意義」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』7 pp.1-40  
 栗島義明 2004 「神子柴文化 —その実像と虚像—」『長野県考古学会誌』107 pp.44-50  
 栗島義明 2010 「神子柴遺跡 —移行期としての文化」『旧石器時代 下』講座日本の考古学 青木書店 pp.331-354  
 栗島義明 2018 「神子柴遺跡再考 —その性格と機能を考える—」『シンポジウム 神子柴系石器群 —その存在と影響—』八ヶ岳旧石器グループ pp.18-28  
 下村修・戸谷今朝登・田中清文・中村由克・望月明彦・堤隆 2009 『小鍛冶原/唐沢B』信毎書籍出版センター  
 杉原莊介1956 「縄文文化以前の石器文化」『日本考古学講座』第三巻 pp.1-42  
 田中英司 1982 「神子柴遺跡におけるデボの認識」『考古学研究』第29巻第3号 pp.56-78  
 千曲川水系古代文化研究所 1998 『唐沢B遺跡』信毎書籍出版センター  
 堤隆 2013 『狩猟採集民のコスモロジー・神子柴遺跡』新泉社  
 長野県考古学会 2004 「シンポジウム 神子柴系石器群をめぐる諸問題」『長野県考古学会誌』107  
 林 茂樹 1956 「長野県手長丘遺跡調査報告」『石器時代』6  
 林 茂樹・上伊那考古学会編 2008 『神子柴』信毎書籍出版センター  
 藤森栄一・戸沢充則 1962 「茶臼山石器文化」『考古学集刊』第四冊 pp.1-20  
 林 茂樹 1964 「御園牧が原遺跡」『日本考古学協会第30回総会研究発表要旨』p.6  
 林 茂樹 1966 『上伊那の考古学調査<総括篇>』  
 林 茂樹 1983 「長野県神子柴遺跡」『探訪先土器の遺跡』有斐閣 pp.286-290  
 林 茂樹 1995 『伊那の石槍』伊那埋蔵文化財研究所  
 藤沢宗平・林 茂樹 1961 「神子柴遺跡 —第一次発掘調査概報—」『古代学』第9巻第3号 pp.142-158  
 山内清男・佐藤達夫 1962 「縄文土器の古さ」『科学読売』第14巻第13号 pp.1-11  
 栗島義明 1988 「神子柴文化をめぐる諸問題」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団紀要』4 pp.1-92  
 八ヶ岳旧石器研究グループほか 2018 『神子柴系石器群 —その存在と影響—』

(2019年12月10日受付/2020年1月31日受理)



神子柴遺跡の石器群分布では平面的な姿のみでなく、垂直的な分布でも注視されるべき状況が確認できる。報告書掲載の断面図に石器群は信州ローム層中に深く包含されていることが記録されており、その深度は-10cmから-20cmにも及んでいる。ローム層中深くから出土した石器群が、平面的に一定のまとまりを持つスポットを形成している点は改めて指摘するまでもない。石器群の形態や石材、製作技術に見られる単位性に加えて、これらの石器群が単体ではなく、パッケージとして梱包されたうえで保管されていた可能性を考える必要がある。

図14 石器群の垂直分布とスポットの関係

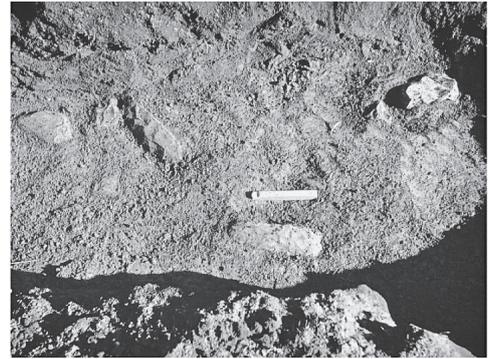
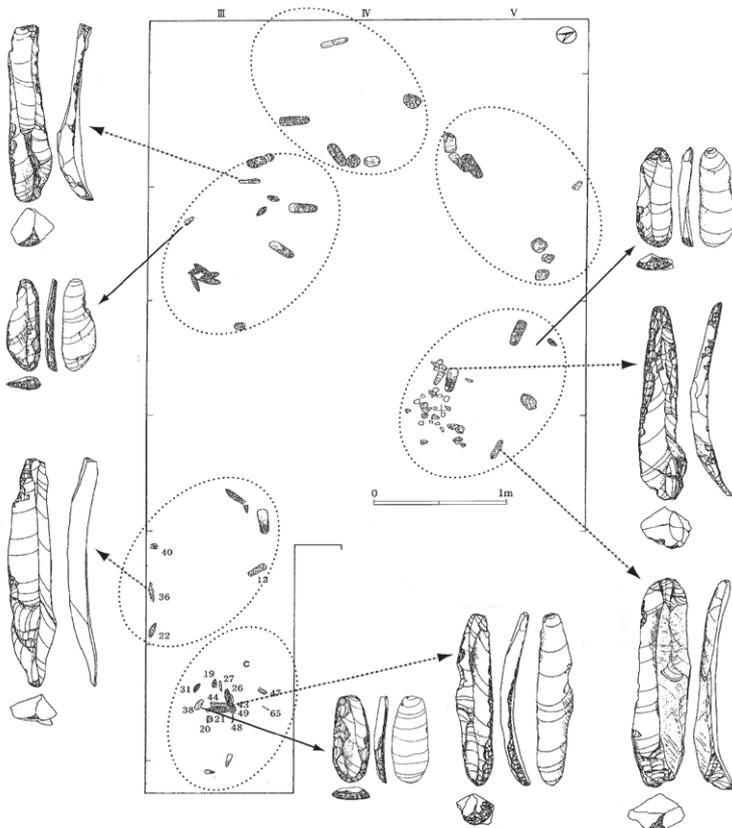


写真4 ローム層中に包含された石器群



神子柴遺跡での石器スポットと撻器分布との関係性は興味深い。石斧が優勢なスポットa, bでは撻器の出土が確認されず、石材の系統（構成）が複雑で複数器種の残されたスポットに撻器が加わる傾向がある。石器交換行為が継続中と判断されるスポットc, d, fでは、刃部再生が繰り返された撻器と大型剥片端部にのみ微細加工が施された撻器とがセットで残されている。スポットeでは後者のみが存在する。来歴を異にした非在地系石材製の撻器類の在り方は、スポット単位に進行した石器交換行為の継続・中断・終了などの指標であった可能性もある。

図15 スポット単位に分布する二種類の撻器

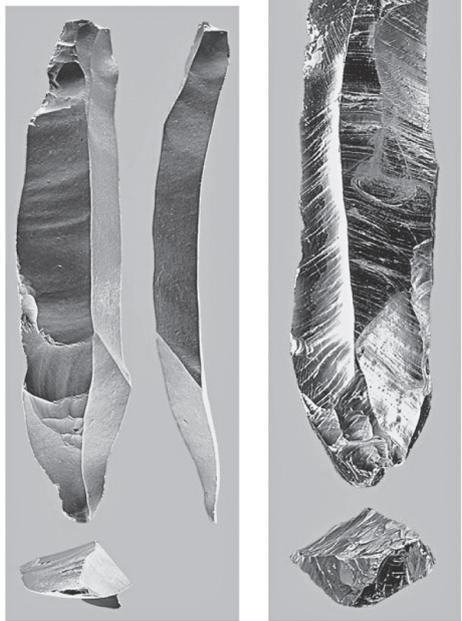
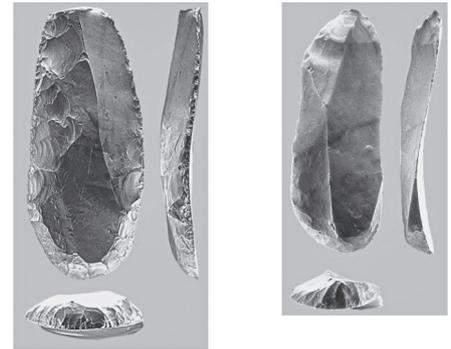


写真5 素材・形態・刃部に見る撻器二形態

# On Mikoshiha debates ; present and future

Yoshiaki Kurishima<sup>1</sup>

## Abstract

We have still some unsolved arguments in the Japanese Prehistoric Archeology. “Mikoshiha Controversy” is one of them and has been unsettled since the end of the Mikoshiha excavation more than five decades ago. During the 1<sup>st</sup> season of the field research at the Mikoshiha site in 1957, then unknown lithic assemblages were discovered; axes/adzes, points, end and side scrapers, bifacially retouched tools, and cores, all of which were large finished tools with no use-wears. Because the industry was found in a loam deposit without potteries, it has possessed fluctuating chronological placements from the final Paleolithic to the insipient Jomon over years.

Although industries with 87 stone artefacts at Mikoshiha, were unearthed from an area of 20 square meters, it is fairly simple in its components, a variety of lithic resources were employed. Sand stone or slate were used for axes/adzes, obsidian or jasper for javelins, siliceous shale or obsidian for end and side scrapers, and obsidian or jasper for cores. It is clearly acknowledged that the main rock resources are manuports procured not in the nearby vicinity, but in the distant regions. This is excluding those used for axes/adzes.

As a result of detailed analysis of a site report published in 2008, I conclude that the industry consists of finished and unused tools, or unfinished preforms. And these lithic artefacts were transported for the purpose of trades from various regions with distinct manufacturing traditions. Lithic concentrations at Mikoshiha are divided into 6 spots consisting of local and remote raw materials. In each spot, transported packages of products seem differently treated; left intact, unpacked or replaced. Mikoshiha is evaluated highly as a site having preserved performances of silent trades, as widely migrating foragers carried in their lithic products and exchanged goods of various origins at different occasions.

**Keywords :** Mikoshiha-site, tools concentration, trade/exchange, depot, tools package

(Received 10<sup>th</sup> December 2019 / Accepted 31<sup>st</sup> January 2020)

---

1 Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University, 1-1 Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo 101-8301, JAPAN